

No j

21世紀のための友情計画

アフターサアー調査チーム報告書 (1988年度)

平成元年9月

国際協力事業団

青 **
JR
89 ::: 37

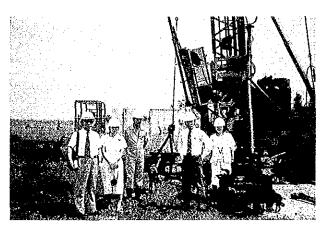
国際協力事業団

20183

ブルネイ



カンポン・アイル(水土集落)へのボート内にて



ブルネイ・シェル石油視察

インドネシア



KAPPIJA21(同窓会)との 意見交換会



小学校訪問 先生との記念写真

マレイシア



帰国青年とのセミナー



フィリピン



外務省表敬訪問



帰国青年職場訪問・国際稲作研究所

シンガポール



シンガポール チャンギ国際空港到着



帰国青年('88勤労青年グループ)と 再会を喜び合う



総理府青少年局において



帰国青年の農家にて

この報告書は、ASEAN 青年の日本招へいに出発した青年招へい事業を日本・ASEAN 双方向の交流に発展させ、永続的な友情を樹立することを目的として、昨年度より開始したアフターケアー調査チーム(ASEAN 6 カ国へ派遣)の報告をとりまとめたものである。

本報告書が関係各位の本事業に対するご理解を一層深め、今後調査チームに参加される方々にとって参考になれば幸いである。

平成元年9月

研修事業部長

はじめに	
! 概要報告 ····································	1
Ⅱ 国別報告	
1. ブルネイ	3
2. インドネシア	17
3. マレイシア	43
4. フィリピン	67
5. シンガポール	93
6. タイ	119
■ 付属資料	
1. 青年招へい事業アフターケアー(日本青年派遣)実施要領	145
1-1 標準スケジュール	148
1-2 参加候補者推薦要領	149
1-3 推薦書様式	151
2. 青年招へい事業アフターケアー業務実施契約書	154
3. アフターケアー調査チーム報告書内容項目	161
4. 青年招へい事業アフターケアー調査チーム派遣に係る会議日程等	162

1、目 的

青年招へい事業で我国での交流に参加した日本青年等をASEAN諸国に派遣し、ASEAN青年の日本招へいから出発した本事業を双方向の交流に発展させ、 専門分野別に本事業参加経験者の日本理解及び研修成果を更に深めるとともに、再交流を促進することによって、来日時に形成された友情を発展させ、永続的な友情関係を樹立することを目的とする。

2. 派遣対象者

都内分野別プログラム関係者、地方分野別プログラム関係者、共通プログラム関係者等「21世紀のための友情計画」日本側交流関係者

3. 派遣国、チーム編成等

ASEAN 6 ケ国に対し、計30名、1 ケ国につき1チーム(5名)合計6チーム(30名)を派遣。 チームの編成は、チームリーダー1名と団員4名による。

4. ASEAN諸国の評価及び要望事項

各国とも日本青年の派遣を相互交流に発展するものとして高く評価している。

なお、日本側への主な要望事項は次のとおりである。(1)継続的派遣 (2)人数枠の拡大(30名程度) (3)各国同窓会のカウンターパートとしての日本側同窓会の設立 (4)相互交流促進の中核となる各国同窓会活動への支援強化

5. 派遣日程等

派派遣国	派遣期間	実施協力団体	概要及びASEAN側の評価等
ブルネイ	昭和63年12月 1日 ~12月10日	国際交流サービス協会	調査団の到着、文化青年スポーツ省大臣表敬訪問を国営テレビが放映する等ブルネイ政府の本事業に対する高い評価と アフターケアチームに対する期待がうかがえる。なおブルネイ側は本調査団派遺を日・ブ青年の相互交流として歓迎し、 継続的派遣を要望しており、受入は同窓会が行うが「ブ」政府も可能な限り支援するとの事であった。
インドネシア	昭和63年11月29日 ~12月 8日	勤労厚生協会	ジャカルタ、バンドン、バリの3ケ所でインドネシア同窓会KAPPIJAとの積極的交流が持たれた。「イ」政府は 交流の深化のためにも同窓会組織の育成と日本青年の「イ」国訪問が重要と考えており、調査団の継続的派遣を要望している。受入れは同窓会が中心となる。
マレイシア	昭和63年11月22日 ~12月 1日	世界青少年交流協会	「マ」側は本調査団を日・マ両国青年の交流深化に貢献するすのとして評価し、30人程度までは受入可能としている。 受入れは同窓会が中心に人事院の協力を得て実施。「マ」側としては今後、日本側と同窓会との間で情報誌を交換する 為日本側窓口の設置を期待している。
フィリピン	昭和63年12月 1日 ~12月10日	青年海外協力協会	比国外務省及び同窓会と今後の相互交流等に関し意見交換。比側は、日・比青年の相互交流を促進する上からも日本からの青年派遣を歓迎している。又、相互交流を促進する上で同窓会の育成が不可欠として、同窓会活動への日本側からの支援を期待している。
シンガポール	昭和63年11月29日 ~12月 8日	ユースワーカー能力開発協会	「シ」国同窓会の活動が活発な事も相まって、極めて積極的な交流が展開された。「シ」側は日本青年の派遣が相互交流に有意義との観点から人数増(30名程度)と派遣期間の延長を強く要望しており、又、日本青年の受入れについては同窓会が全面的に実施するので滞在スケジュールは「シ」側で検討したいとの提案がなされている。
タイ	昭和63年11月29日 ~12月 8日	全国農村青少年教育振興会	タイ国総理府青少年局が受入窓口となった。日本青年の派遣は日・タイ両国青年の交流に有意義であり、同窓会組織化 を促進する大きなファクターとなるであろうと高く評価している。現在同窓会設立の手続き中であり、設立までの間、 参加青年が個人的に資金を出し合い機関誌の発行を行っている。

Ⅱ 国別報告

ブルネイ・ダルサラーム

S.63.11.30~S.63.12.9

(社)国際交流サービス協会

1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

	. !	氏	名	年齢	・性別	現住所/所属先
チームリーダー	利	岡	聖二	3 2	男性	武蔵野市西久保2-15-27
						社団法人 国際交流サービス協会 国際交流部 受入課
		··· · · · · · · · · · · · · · · · · ·				中央実施協力団体実務担当者
メンバー	青	木	勝彦	4 8	男性	町田市金井町2405-10
			•		٠	財団法人 日本武道館
	.*				٠	振興部部長
	<u>.</u>			_		共通プログラム担当者
メンバー	小	室	俊明	3 3	男性	所沢市北秋津201-1-401
						二松学舎大学講師(英語)
		·				合宿セミナー参加者
メンバー	松	井	真理子	3 3	女性	島根県松江市西川津町1094-5
						島根県総務部総務課
. :	-				<u> </u>	地方公共団体窓口実務担当者
メンバー	Л	谷	寿 尨	3 3	女性	島根県松江市荘成町168
						島根県国際交流青友会事務局長 地方実施公共団体
						地刀天旭公共団体

1-2 調	查日程		
月 日	時刻	日 程	備考(宿泊等)
11月30日		(東京グループ)	
(水)	07:50	羽田発 ANA015	
(XIC)		大阪着	
	00.00	(島根グループ)	
12 1	22:05	松江発 急行だいせん(29日)	
	1	大阪着	
		大阪にて合流	
	11:05	大阪発 CX503	プリンスホテル
	· ·	ホンコン着	Tel:3-723-7788
	午後	自由行動	
12月1日	17:00	バンダル・スリ・ベガワン空港着 CX634	
(木)	17:50	ナショナル・イン着	ナショナル・イン
	1	プログラムオリエンテーション	Tel:41128
	19:30	ブルネイ大学主催歓迎夕食会	
		(於:ブルネイ大学クラブ ハウス)	
12月2日	08:30	ホテル発	
(金)	\	マレー・テクノロジィー博物館見学	
	1	カンボン・アイル(水上集落)視察	
]	家庭訪問(カンボン・アイル)	"
	12:00	昼食会(カンボン・アイル帰国青年宅)	
	14:00	市内視察(王宮、チャーチル博物館、モスク)	
	19:30	日本大使館米田公使主催夕食会	
12月 3日	08:30	ホテル発	
(土)	08:45	文化青年スポーツ省 Pehin Dato Hj Hussein大臣	"
		表敬	
	09:45	日本大使館大鷹大使表敬	
	10:30	スルタン・ハッサム・ボルキア・スタジアム訪問	
	12:00	文化青年スポーツ省 PG. Ibrahim Damit 主催昼	
		食会	
	14:00	ブルネイ大学訪問、学生との懇談会	
		ブルネイ技術院訪問	家庭滯在
	17:00	ホームスティ開始	
12月 4日	終日	ホームスティ	
(日)			"
12月 5日	08:30	ホームスティから集合	
(月)		スナウト農業研修センター訪問	
		同センター主催昼食会	ナショナル・イン
		農業リサーチセンター	Tel:41128
	1	使節団主催夕食会	

月日	時刻	日程	備考(宿泊等)
12月 6日	07:30	ホテル発	
(火)	09:30	ブルネイ・シェル石油本社訪問	
	11:30	ブルネイ・シェル石油現地視察	
	13:00	ブルネイ・シェル石油主催昼食会	ナショナル・イン
	14:30	家庭訪問(帰国青年宅)	Te1:41128
	17:00	自由行動	
	19:30	帰国青年主催歓送会	•
12月7日	08:00	ホテル発	
(水)	09:30	バンダル・スリ・ベガワン空港発 BI421	· ·
	11:30	シンガボール・チャンギ空港着	
	12:30	ダイイチホテル着	ダイイチホテル
	15:00	JICAシンガポール事務所表敬	
		シンカポール経済援助についての説明	
	19:30	アフターケア・シンガポールチーム歓送会出席	
12月 8日	午前	市内見学	
(木)	12:00	JICAシンガポール事務所石崎所長主催昼食会	
	午後	市内見学	"
	19:00	家庭訪問(帰国青年宅)	
12月 9日	終日	市内見学	
(金)	17:00	シンガポール同窓会主催夕食会	
		(東京グループ)	
:	23:00	チャンギ空港発 JL710	
	06:15	成田着(10日)	
		(島根グループ)	"
	00:30	チャンギ空港発(10日) JL714	
	07:20	大阪着	
	09:00	大阪発 JAS613	
	10:05	出雲落	

2. 現地活動報告

2-1 表敬、訪問先に於ける意見交換内容

プログラムの策定については、10月8日付書簡をもって依頼。依頼内容については、帰国青年の再交流の実施、及び貴地事情の視察の観点から、①市内事情視察(帰国青年同行)、②受入省庁、及び関係機関表敬、③帰国青年職場訪問(大学、学校含む)、及び青年との意見交換、④ホームスティ、⑤技術関係施設、及び基幹産業の視察、⑥帰国青年との交流等を依頼した。以上の日本側からの依頼事項に対し、先方からの回答、提案を要請。

実際は、郵便事情等の理由により、先方政府とスケジュールを再度十分な検討、調整を行

う時間的余裕がなく、最終的には、当初の要望がそのまま日程に反映され、別添のような滞在日程が策定された。

(1) 表敬については、本使節団受入省庁として文化青年スポーツ省、及び日本大使館を訪問。

文化青年スポーツ省訪問の際、フセイン大臣より、現在ブルネイでは、文化、スポーツを通じて健全な青少年を育成することに力を入れており、日本との人的交流、文化交流を通じた人材養成という観点から、本青年招聘事業は極めて高い評価を得ている旨説明があった。

一方大臣からは、日本での本事業の評価について質問があった。それに対しては、① 日本側も同様、本事業は日本とアセアン諸国の間の相互理解を深める上で重要な事業と 高く評価していること、②地方自治体と協力して日程を作成しているので全国レベルに 浸透していること、③特にホームスティ等一般の人々が参加し、外交レベルとは別に民 間レベルでの草の根交流促進に寄与している等簡単に説明を行った。

他に、大臣は過去2度の訪日経験があり、日本の造詣も深く、訪日経験から日本語会話学習の必要性を重視し、派遣青年に対し事前に日本語会話学習の機会を与えたい旨説明があった。

(2) 滞在中の訪問先としては、①帰国青年職場としてスルタン・ハッサム・ボルキア・スタシアム、ブルネイ大学、ブルネイ技術院、②技術関係施設、及び基幹産業の視察として、スナウト農業研修センター、農業リサーチセンター、ブルネイ・シェル石油を訪問した。

各訪問先に於ては、各部署で重要な地位を得ている青年が対応し、先ず概要説明を中心に施設見学、質疑応答という順序で進行した。しかし、時間的な制約も有り、意見交換よりもブリーフィング、及びそれに対する質疑に終始し施設の概要を知るに留った。

2-2 帰国青年同窓会等の活動状況

- (1) 同窓会の組織、活動状況については現在は調整段階。具体的な組織編成と活動内容については、今回のアフターケアプログラムの成果・報告を検討した上で会合を開き、正式に決定される旨説明があった。
- (2) 今回初代同窓会会長として PG. Sabri bin Hj Mohammad (1986教員・学生グループリーダー、現教育省行政担当官)が選出された。今後とも青年派遣・受入の実務については文化青年スポーツ省福祉青年スポーツ局が窓口となる。(担当者: Hj Mohd Taib Hj Osman, Asst. Chief Commissioner, Brunei State Scout Association、1986 アセアン混成グループ参加者)

2-3 セミナー・交流会実施状況

(1) 訪問先,交流会等の内容については、今回、具体的なテーマを事前には設定せず、基

本的には先方政府に委ねた。全体的に訪問先での時間が限られていた為訪問時間の大半が概要説明に追われ、青年との懇談の時間が十分にとれなかった。今回の経験を基に、 当方で事前に協議の上セミナーの内容も具体的に先方に伝えておくことの必要性を感じた。

- (2) 交流会は、色々の分野の青年と話あう機会が、多様な形式で、又数多く用意されていた。特に、ブルネイ大学は、構内での茶話会方式で、教官・学生が自由に参加し懇談できた。このような小グループで、分野別の集りは、懇談には効果的と思われる。今後は、出来る限り随所に、又複数回設定されることを要望したい。尚、昼食、夕食会等は全て訪問先、帰国青年側で手配されており、帰国青年と料理を食べながら、比較的自由な雰囲気で、日本滞在の思い出等歓談できた。
- (3) 帰国青年と懇談する度、職場の事、日本滞在の事、本事業等幅広く話されたが、青年と懇談の機会を重ねる度、いずれも教育に関して政府の手厚い保護を受けていることが印象深かった。大臣の説明にあった様に、如何に人材養成に力を置いているかを実際に何知ることができ、本青年招聘事業の意義、重要性を担当者として改めて実感した。
- (4) 滞在プログラムの中に総込まれていた家庭訪問も、生活・文化習慣を直接肌に感じ、 自由な雰囲気で懇談できるので、帰国青年との交流活動の一環として有意義なプログラ ムと思われる。
- 2-4 ホームスティ実施状況 (ホームスティリストは別紙参照)

ホームスティは、金曜日の夕刻から日曜日の朝まで2泊3日実施され、滞在中一番印象深く実り多いプログラムであった。ホームスティ家庭についても、場所、家族構成、又日本青年の職種など十分考慮された上で選考されていた。ホームスティは、単なる儀礼的で一過性の訪問と異なり、時間の余裕を持って十分話し合う為、相互の理解を計る上で、又ブルネイの文化、生活習慣を知る上で貴重な体験であることが日本青年側も改めて認識できた。又、滞在中2、3回帰国青年の家庭を訪問したが、このようなホームビジットも、ホームスティ同様相互の認識、理解の上での一助と成った。

氏 名	ホストファミリー	職 業
利岡聖二	Mr.Jasni bin Hj.Abd.Latif Na 765 a Jalan Pelumpong,Pantai Muara	Rehabilitation Officer A1-1stah Drug Rehabilitation Center Welfare Youth and Sports Dep.
	Bandar Seri Begawan, Negara Brunei Darussalam (1986年度 公務員グループ)	Ministry of Culture, Youth & Sports Old Airport, Berakas.
青木 勝彦小 室 俊 明	PG Sabri bin PG Hj Mohammad Na 6 Kg Lambak Kanan Jalan Pasir Berakas, Bandar Seri Begawan, Negara Brunei Darussalam (1986年度 教員・学生グループリ ーダー)	Administrative Officer Ministry of Education Old Airport, Berakas.
松 井 真理子	MD Noor bin Hj.Salleh № 117/E Kampong Setia A Bandar Seri Begawan, Negara Brunei Darussalam (1985年度 公務員グループ)	Asst. Town / Country Planning Officer Town & Country Planning Dep. Old Airport, Berakas.
川谷寿恵	PG.Hj.MD.Daud bin PG Hj. Mahmud Na 24 A, Kg.Pg.Pemanca Lama Bandar Seri Begawan, Negara Brunei Darussalam (1987 年度 グループ)	Asst. Supervision Swimming Pool Welfare Youth and Sports Dep. Ministry of Culture, Youth & Sports

2-5 現地実務担当者からの要望、及びコメント

(1) 本滞在の全体予算、及び明細を予め提示してほしい。

これについては、今回JICAからは航空運賃と報告書作成費が支給されるが、それ 以外の宿泊、食事、交通費は全て自己負担であることと、当初、現地での諸経費等の単 価などの情報が不足していた為、事前に予算を提示するのは難かったと回答。

- (2) 宿泊、食事、交通費については、前広に予算金額を提示すれば各方面に交渉の余地有り。又宿泊所については、文化青年スポーツ省管轄の青少年センターを推薦された。食事込みで安価で交渉可能。尚、今回朝食と使節団主催夕食会以外の食事は、全て先方(訪問先、帰国青年側)より手配。
- (3) 車両については民間からの借り上げは困難なため、車両借上については文化青年スポーツ省が全て手配。

- (4) ホームスティの受入については、前広に通知があれば20名程度でも可能。又期間の 延長も可能。但し、ホームスティを効率良く行う為には、金、日の休日をはさんだ2泊 3日が望ましい。
 - (5) もっと早期に本アフターケアについての連絡がほしい。期間、人数、予算、参加者の プロフィールを余裕をもって知らされれば、手配は全て同窓会で可能。ぎりぎりの連絡 では、協力は困難。又本プログラムが改善できるようフィードバックがほしい。

2-6 問題点、反省点

次年度への本アフターケア事業の改善を計るため、本滞在を通じて感じたプログラムの問題点を指摘したい。

<先方政府との連絡、及び手配上の問題点>

(1) 先方政府に早期コンタクト

ブルネイについては、他のアセアン諸国と異なり、JICAの海外事務所もなく、又 同窓会の情報が不足していた。今回は、直接先方の文化青年スポーツ省宛に書簡をもっ て受入を依頼したため、再度のスケジュールの調整を行う時間的余裕がなかった。

先方政府に直接書簡にて依頼する場合、郵便事情、日本青年の選考、又相手国、及び 日本青年間の打合せの準備期間等を考え、少なくとも出発の3カ月まえに連絡を取る事 が望ましい。

(2) 事業概要英文パンフの作成

本アフターケア事業を、予め先方政府、及び帰国青年に周知するため、英文の事業概要パンフレット等資料作成と、各関係諸国に事前配布を国際協力事業団に要望したい。

(3) アフターケア・プログラムの目的の明確化

帰国青年との再交流の実施、及び貴地事情の視察という観点から、主要産業、施設の 訪問を中心としてブルネイの社会、文化、経済等を知るプログラムとしては非常に満足 ゆくものであった。しかし日本青年の間で、本事業プログラムの目的等の受けとめ方に、 多少混乱を生じた。

本来のアフターケアという観点から、次回は、下記の様な具体的な活動状況を織込ん だプログラム作成を、先方政府に要望したい。

① 帰国青年と本青年招聘事業についてのデスカッション

本計画全体の目的の再認識を図り、日本滞在中に生じた誤解や理解不十分な点を補足するため、各年度、各分野の帰国青年と本事業に対する感想や、改善策などを改めて協議(良かったこと、悪かったこと、文化の違いで考えさせられたこと等)。

形式としては、分野別形式、分科会形式をとり、複数回の実施。

② 職場訪問の選定

産業、施設よりも帰国青年の職場を中心とした訪問先を選定。又訪問先での時間を

十分に取り、概要説明や施設等の視察以外にも、帰国青年と意見交換する機会を設定。 内容についても、具体的に、そこで帰国青年がどのように働き、帰国青年が今どうい う職種にあり、日本滞在の経験、知識がどのように生かされているか、又次の派遣青 年に対しどの様な研修を要望するか等事前にテーマを決め、先方に知らせるのが望ま しい。

③ テーマの事前設定

テーマも日本での研修成果、及び相手国の社会、文化、経済事情に照して、先方受 入機関、及び日本側で協議の上、設定することが望ましい。

(4) 帰国青年との交流形式

形式にこだわらず、少しでも多くの帰国青年と話あう機会を設定。滞在中、ホームビジットは交流の上で極めて効果的であった。夕食などは、ホームビジットをもっと活用し、帰国青年宅にて4、5名位集まって自由な雰囲気にて懇談するのも一案。

(5) 滞在中言葉の問題

団員の中で通訳を兼務するのは、人数が5名と少数で個々にかかる業務分担が多いの で実質上困難。訪問先での内容理解、質疑応答を更に充実、又効率的に行うために、討 論、懇談、質疑応答等を充分通訳できる語学力を有した通訳者の現地庸上を希望。

- (6) 滞在日数は今回1週間の滞在であったが今回と同様の内容で、セミナーや自由時間を 設け滞在を10日間に延長しても可能と思われる。
- (7) 先方受入機関との打合せの充実を計る。
 - ① 訪問先の時間を少し長くし、質疑、懇談の時間を十分に取る。
 - ② 日程中に、アフターケアという観点に置いたプログラム作り。

<日本青年側の問題点>

(1) 日本青年選考の問題

今回日本青年選考にあたり、当協会としては、教員、公務員を中心に保補者をあげていったが、特に候補青年の休暇の取り方について、所属先の事務が錯綜する経緯があった。例えば公立の教員の場合1週間以上の出張の際、文部省、教育委員会の承諾が必要となる為、本プログラム参加は実質上不可能であった。又、教員についていえば、本計画への参加希望者は多く、夏休みを利用できれば広く教員の中からの募集も可能と思われる。

これら日本青年側の事情も十分汲み取った上で派遣時期、及び期間を決定されるよう、 又各関係所属先に対し、協力依頼要請を国際協力事業団で一括して取り行うことも同時 に検討願いたい。

- (2) 日本青年側の打合せの充実を計る。
 - ① 本アフターケアプログラムの目的、主旨の統一。

- ② 個々の団員の要望事項(訪問先等)の事前聴取、及び調整。
- ③ 訪問先での話合う内容の事前打合せ。
- □ ④ 日本人側の役割分担
- (3) 日本側参加者全員に対して本計画の過去の予備知識、及び帰国青年の詳細な情報(青年の職場での役割、滞在日程等)の周知。
- (4) 幅広い人材を確保するため自己負担の廃止

団員間でも本プログラム参加に係わる自己負担が異なるので、今後は航空運賃以外の 現地での宿泊、食事の自己負担を更に軽減する、あるいは全額支給の方向で検討願いた い。

3. 調査チーム参加者の感想

ブルネイ空手マンとの出会い

(財)日本武道館 青木 勝彦

アセアン青年招聘事業のアフターケアプログラムとして、初の派遣が行われ、ブルネイ・シンガポールチームに参加し、帰国してからすでに1週間が過ぎた。

厳冬の日本から熱暑の東南アシア諸国へ、そしてまた大気の凍る日本へ。この間わずか10 日間。過ぎてしまえば、それは走馬灯に写し出された儚絵のひとときと言えよう。

連日の見学、視察、交歓会、レクチュア、ホームスティ等々、まさに駆け足の10日間であった。

われわれは東京グループ3人と島根グループ2人が12月30日午前9時に大阪で合流、そこで顔合わせを済ませ計5人でチームを結成、香港経由でブルネイへの旅となる。

大阪発11時5分。香港へは午後2時15分着。ことでは公式行事は全く予定がなかったが、 チームメンバーの1人、川谷さん(島根県国際交流青友会)の友人からの連絡で地元青年3人 が空港まで出迎え。さっそく予期せぬ交流が始まった。

九龍地区のホテルにチェックインを終わるとすぐ市内見学。観光としてではなく素顔の香港を見たいというわれわれの要請に応えて、青年たちが文字通り、地元の生活地域へ案内してくれた。知己が居なくてはこうはいかないだろう。人、人、人で東京に勝るとも劣らない街のエネルギーに圧倒される。

午後7時過ぎ、案内の青年たちが交替。大衆食堂でエスニック料理を食べながらの交歓も盛りあがった。食後、香港島へ渡り、登山電車に乗って山頂から名だたる香港の夜景を楽しんでホテルへ帰り着いたら、時計は11時を回っていた。

2日目は中国式の飲茶で朝食兼昼食をとり、街をブラリとすると、すでに出発の時間。午後 2時、いよいよブルネイ・ダルサラーム6泊7日のスケシュールに向かっての旅立ちである。 ブルネイは今プログラムのメーン。ちょっぴり緊張感が走る。

快適な3時間の飛行を終えて午後5時、バンダル・スリ・ブガワンに到着すると、われわれ のアテンドを引受けてくれた帰国青年たちで構成する同窓会実行委員会の面々と日本大使館の 方々が空港内まで出迎えてくれて入国手続きも極めてスムーズ。

空港ロビーに出ると、いきなりWell come の横断幕が目に入って大きな拍手がわいた。 ライトが光りフラッシュがたかれ、テレビカメラが回る。誰か重要人物でも来たのかと思ったら、われわれに対する取材ということで改めてビックリする。

さっそく青年たちと記念撮影。チームは、私を除いては現地の青年たちと顔見知りのメンバーが多く、たちまち旧交をあたためる親善の輪ができた。

用意してくれたジーブ2台に分乗してホテルに入ると即座に同窓会実行委員長テイブ・オズマン氏が主宰するオリエンテーション。話を聞いているうちに、見事なプログラミングというか隙のない行程表と時間割に感心するやら驚くやら、とにかく自由時間というのは皆無に等しいのである。

当着日、12月1日当夜のブルネイ大学における夕食懇談会から始まって6日夜のお別れバーティー最終日まで日程がビッシリ。真面目な国民性とわれわれに自国を充分理解させようとする委員たちの意図が胸に来た。

ブルネイは独立回復後まだ4年、若い国である。大きさは日本で言えば三重県と同じくらいだという。小国だが石油、天然ガスの産出によって世界一の金持国と喧伝され、いま国際的な話題になりつつある国だ。

国民所得も高く、その上無税。教育、医療もいっさい無料という信じられないようなお国柄である。現在、科学、工業、教育等々にわたって、国勢充実を目指して大きな振興策をとりつつあり、国民は建国の意欲に満ちていると見た。イスラム教国で信仰心の厚い国民性だと思う。

行く先々すべてに帰国青年同窓会の実行委員メンバーがジープを駆使してエスコートしてくれた。参考までに6日間の訪問先のあらましを列挙すると、博物館、王宮、チャーチルメモリアル、水上部落、モスクの市内視察のほか、福祉青年スポーツ省、日本大便館、ナショナルスタジアム、ブルネイ大学、ブルネイ技術工学院、シナウト研修センター、キラナス研究センター米作研究所、BLNGシェル石油などの訪問、見学、レクチュア、これに連日の昼・夕食懇談会、それにホームスティが2日間である。

どこへ行っても帰国青年の活躍が見られ、他の人々も日本への関心度は高い。機械、器具、電気製品、日用品にも日本製が多く、街を走る車のほとんどがこれまた日本製。正直に言って、日本ではまだブルネイの知名度は決して高いとは言えないだろうが、逆にブルネイにこんなにニッポンがあろうとは想像のほかだった。

さて、私は仕事柄どうしても武道、武街に目が向く。私の奉職する日本武道館は、わが国の 伝統文化である武道による青少年の健全育成と武道の普及振興を目的とする財団である。 このアセアン青年招聘事業との関わりも、伝統文化である武道をアセアン諸国の青年たちに見てもらい、日本と日本人を知るよすがとなるよう共通プログラムの中の一セクションを担当しているわけで、これがどう評価されているかは、今回の訪問中、当然だが最も関心の高いところであった。

そして、私のこの関心事を今回のアフターケアプログラムは極めて満足させてくれた。帰国 青年たちのいる訪問先で自己紹介の際"ニッポンプドウカン"と言うと、必ず青年たちは大き な反応を示してくれた。一様に強い印象を受けているという。

家庭訪問を4軒したが、内3軒に日本刀(模擬刀)が飾られてあった。いずれも来日のとき に購入したものだそうで、聞けば日本訪問の際、ほとんどのブルネイ青年がこの模擬日本刀を 持ち帰っているという。日本武道館における武道見学の影響が出ている証左だと思わず頬がゆ るんだ。

それにも増して、私が最も印象を強くしたのはホームスティであった。これは実行委員会の はからいによるものだろうが、私のホームスティ宅は帰国青年同窓会長のサブリ・モハメッド 氏というロイヤルファミリー(王家一族)で教育庁に務める若手エリート、松涛館流空手道二 段の武道青年であった。

敬虔なイスラム教徒でイギリス留学中に日本の空手にとりつかれ、イギリス人の女性を妻に する。いまブルネイを代表する空手の代表選手で幾つかのジム(道場)を持ち、後進の指導に も情熱を燃やす。一方、絵画でも異才を発揮し陶芸をもものにする芸術家、まさに文武両道の 青年武道家である。

彼はのっけからこう言った。

「道場は私の活力源でいわば朝食、型を修業する鏡はこよなき友、空手は私の人生そのものた」

ホームスティの間、彼との会話の大半は空手道に終始した。アジア地区の大会に出場し、前 回決勝で敗れた屈辱を稽古を積んでどう晴らすか、ブルネイの空手道隆盛をはかって自国のチ ームをいかに強くするか etc.

その彼が、 現在センセイと呼び、パートナーとして最も信頼しているのが、ブルネイのナショナルコーチとして招聘されて3年目になる野中保信氏、30歳。氏は糸東流空手道4段、高知県南国市の出身で昭和56年大阪経法大卒の空手マン。ブルネイ空手の指導者として各方面に著名である。

ナショナルスタシアムで常時指導にあたっているほか学校や道場の巡回指導で多忙な毎日を 送っている。

一夜、サブリ氏の弟の経営するレストランで野中氏を交え会食の機会を得た。この席でも終始空手道談義。聞けば2人が中心になってブルネイの学校教育に空手道をとり入れる運動を企画しているという。

野中氏がポツンと言った。

「日本もコンピューターや工業製品の海外進出だけでなく、もっと文化、スポーツの普及に 力を入れて、そのための人的派遣を考えてくれればいいのですが……」

実際に異国で孤軍奮闘している人の話だけに言葉の切実さが胸に刺さる。正直に言って、これほどブルネイで日本の武道、空手道が盛りあがっているとは予想外であった。うれしい誤算である。2人の武道青年の情熱が頼もしかった。

サブリ氏と野中氏の間に、日本武道の特質である礼の精神に裏打ちされた信頼感がある限り、 ブルネイの空手道は大きな飛躍をとげるだろう。

ホームスティの中でこんなことがあった。サブリ氏は4歳の女の子と2歳の男の子の父親。 この2人の子供が短時間のうちに私によく懐いてまつわりついた。女の子がふざけているうち に興に乗って私を挙でポンと突いた。

その時、いつもはほとんど子供を叱らないサブリ氏がキッパリと宣言した。

「あらゆる人に対して、絶対に空手を使ってはいかん!」。やさしくジョーク好きの彼がこの時は一瞬真顔になった。"オール・メン"と、あらゆる人に対しては、のところに特に力を込めた。

武道は礼に始まって礼に終わる。「武」の文字は分解すれば「才を止める」と書き、究極の 平和を希求する。その武道精神をサブリ氏は充分に理解していると直感した。

こういう青年が各国で活躍を続けて中核的存在となってくれば「21世紀のための友情計画」は、精神のうえでも必ず大輪の花を咲かせ、大きな実を結ぶだろう。

このホームスティで接したサブリ氏のほか、ブルネイの人々はすべて温かかった。明るく純朴で真摯だった。

空港での別れの時、青年たちの何人かは目をしばたいていた。人間と人間との触れ合い、友情が信じられた。願わくば、国際化の波に洗われることによって、この国の情愛に満ちた国民性が失われないことを祈るばかりだった。

今回のアセアン青年招聘事業アフターケアの主目的国であるブルネイ国訪問を終え、別れを 告げて機中のシートに身を埋ずめた時、深い充足感と安睹感が胸いっぱいに広がった。

その感慨に浸っている間もなく、機は早くもシンガポール着。時に12月7日午前11時30分。

シンガポールでも空港に帰国青年同窓会のメンバーが出迎えてくれて、ワゴン車でホテルに 直行、チェックインを済ませて直ちに国際協力事業団シンガポール事務所に出向き、石崎光夫 所長からたっぷり2時間のレクチュアを受ける。

その夜はシンガポールチームのサヨナラバーティーにわれわれブルネイ組も招待を受け交歓。 翌8日は市内見学と夜はホームビジット。シンガポールはゆっくりできると思ったが、やはり そうもいかなかった。 同窓会側もシンガポールチームと入れ替わりにやってきたブルネイチームの世話をするのは 大変な労力だろうと同情する。それでも笑顔で応待にあたってくれる青年たちに感謝の気持が 募る。

最終日9日はセントーサ島へ出向き、メモリアルホールなどを見て、午後は市民ホールの見学、交歓夕食会の後、ホテルで一休みして空港へ。早、別れのときだ。シンガポールの青年た も数人に見送られて午後11時、東京へ向かって帰国の途についた。眼を閉じると、この10 日間に繰り返した人々との出会いの数々が頭の中を駆け巡った。

4、総 評

現在ブルネイでは、人材育成に力を入れており、特に本青年招聘事業は青少年育成の面で高く評価されている。この意味で、今回本アフターケア事業が実施されたことは、実に時宜を得た訪問と思われる。ブルネイでの滞在日程は、当初の要望が殆ど満たされており、全体的には実り多いプログラムであった。ホームスティ、帰国青年との交流を通じ、大いに友情を温め、再び親睦を深めることが出来た。滞在中、帰国青年との楽しい思いでも多く、予想以上の成果を納めることができた。次年度の青年招聘事業実施についても、幾多の有益な示唆を得たので、今後とも本事業の益々の改善を計っていきたい。

インドネシア

 $S.63.11.29 \sim S.63.12.8$

(社)勤労厚生協会

1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

					Γ	
		氏	名	生年月日	性別	(上段)現住所 (下段)所属先
チーム	٠	加藤	幸雄	昭和		
リーダ				22. 6. 13	男	前橋市大利根町2-28-1
						(粉加藤計算センター
メンバ	-	吉岡	慧治	昭和		
	!			22. 5. 25	男	前橋市天川大鳥町 3 - 8 - 9
						三陽測量佛
メンバ	!	多田	贀	昭和		
				31, 4, 4	男	国立市東 3 - 1 4 - 2 3
	. !					一橋本部 (四) 宿舎 CB11号
						国立オリンピック記念青少年総合センター
メンバ		宮崎	祥一	昭和		
	. !	i.		35. 11. 4	男	横浜市南区山谷115-1-203
	!					運輸省
メンバ		野内	和夫	昭和		
	:			37. 2. 27	男	板橋区西台1-39-8
	i					京王帝都電鉄㈱

1-2 調査日程

11月29日(火)

- 11:00 GA873にて成田出発(エンシントラブルで3時間FLIGHT-DELAY)
- 20:00 ジャカルタ スカルノハット空港着 KAPPIJAメンバー 7名マイクロバスにて出迎え
- 22:00 PRESIDENT HOTELKT, MEETING.

JICAの友部氏。KAPPIJAのリーダーDrs. Yanhiksas 他約10名参加。 11月30日 (水)

- 08:30 JICAインドネシア事務所訪問。次長松岡和久氏、次長佐藤幹治氏と対談。
- 09:30 在インドネシア日本大使館訪問。一等書記官大田慎一氏、大使館員竹山健一 氏と対談。友部氏随行。
- 10:30 背年スポーツ省表敬訪問。第一補佐官 Soenaryo 氏と対談。
- 14:30 KAPPIJA-21と打ち合わせ及び協議。プレジデントホテル泊。

12月 1日(木)

- 09:00 小学校視察。CORP DRUMBANC MEXICO
- 11:30 CEVEST訪問。
- 15:30 中学校視察 BINTARA DEPOK
- 19:00 交流パーティ。青年スポーツ省、大使館、学校、JICA、KAPPIJA約50 名参加
- 21:00 KAPPIJAメンバーと交流。プレジデントホテル泊。

12月 2日(金)

13:30 青年スポーツ省に於て、セミナー両国青年デイスカッション テーマ「国際結婚について」

弁護士 Zulpadli Barus (KAPPIJAメンバー)の基調講演のあと、ディスカッション

19:00 KAPPIJAメンバーと食事をしながら交流。プレジデントホテル泊。

12月 3日(土)

- 07:00 マイクロバスにてバンドンに出発。友部氏、KAPPIJA8名随行。
- 12:00 バンドン着。昼食をしながら交流。
- 15:00 バンドンKAPPIJAとデイスカッション。友部氏シャカルタへ帰社。
- 17:00 ホームスティ
- 20:00 伝統舞踊、音楽、コメディコンテスト観賞。

12月 4日(日)

- 10:00 バンドン青年と交流。TANGKUTSAN PERAHU(火山観光)
- 17:00 HOMESTAY FAMILY
- 20:00 STUDIO FAST (変更)にてKAPPIJAと、お別れパーティ。

12月 5日(月)

- 10:45 特急列車にてバンドン発。ホームスティファミリー、KAPPIJAメンバー見 送り。
- 14:00 ジャカルタ着、マイクロバスをチャータしJICA事務所へ最終報告。 国際協力事業団インドネシア事務所長北野康夫氏と懇談。
- 19:55 スカルノハット空港 GA 6 6 6 でバリ島へ出発。 KAPPIJAメンバー 6 名見送り。
- 22:40 バリ島、テンパサール空港着。ホテル バリビーチ泊。

12月 6日(火)

10:00 バリKAPPIJAのイダアスティティに電話するが留守で連絡取れず、自由行動をする。

20:00 6 時頃連絡がとれ、夕飯をたべながら、バリのKAPPIJA他青年数名と交流。 ホテルバリビーチ泊。

12月 7日(水)

10:00 バリ青年数名の案内で、Museum、Temple 他市内観光。

21:05 テンパサール空港より、GA872で帰国。

12月 8日(木)

07:30 成田着

1-3 主要面談者

ジャカルタ

Mr. Soenaryo, Drs. m. sc.

Mr. Yan Hiksas, SE

Ms. Micke Sri Narukita

Mr. Faizal SE

Ms. Dian Mardiani

Mr. Wan Noverie. S.E.

Mr. Wastaatmadja, Drs. S.K.

Mr. Purnomo Abdulcadir, DRS

Mrs. Rahayu Ningsih

北野 康夫氏

松岡 和久氏

佐藤 幹治氏

太田 慎一氏

竹山 健一氏

青年スポーツ省第一補佐官

KAPPIJA委員長

KAPPIJAメンバー

KAPPIJAメンバー

KAPPIJAメンバー

KAPPIJAメンバー

SMA BINTARA DEPOK校長

CEVEST所長

SD.GUNUNG 05 PAGI校長

JICAインドネシア事務所長

JICAインドネシア事務所次長

JICAインドネシア事務所次長

日本大使館一等書記官

日本大使館事務官

バンドン

Mr. Bachrudin Nasori, Drs

Ms. Nurhaida

Mr. Asrul

KAPPIJAメンバー

KAPPIJAメンバー

KAPPIJAメンバー

バリ

MS Ni Ketut Prabhawati

Mr. Mardawa Padangratha

KAPPIJAメンバー

KAPPIJAメンバー親戚

2. 現地活動報告

2-1 表敬、訪問先における意見交換内容

「21世紀のための友情計画」青年招へい事業アフターケア実施のためのインドネシア訪問団(以下、訪問団)は、前述の主目的の遂行のため、昭和63年11月30日のJICAインドネシア事務所を皮切りに、在インドネシア日本大使館、現地官庁、教育現場、諸団体、JICAの技術協力現場等を訪問あるいは視察をし、訪問団としては、

- ① インドネシアの文化と歴史の理解
- ② インドネシアの市民生活と経済発展の現状の把握
- ③ 日本の経済援助、技術協力の現状と効果の把握
- ④ 青年招へい事業が参加者(来日者)のその後に与えている影響の把握
- ⑤ インドネシア青年の日本への関心と相互関係発展への意欲の理解
- ⑥ インドネンア青年の21世紀へ向けての国づくりへの意欲の理解 等をポイントにして、これに臨んだ。

以下では、訪問・視察先毎に、そこでの訪問団の行動、意見交換内容等について若干の所感とともに述べることにする。

(1) JICAインドネシア事務所(11月30日、12月5日)

11月30日午前一番に訪問団はJICAインドネシア事務所を訪れ、今回のコーディネーター的役割を果して頂いた友部氏、当事務所次長松岡氏と面会した。そこでは、今回の目的(前述)、行動予定の確認を行うとともに、9日間のインドネシア滞在にあたっての留意事項等を教示して頂いた。当日は、当事務所長が不在であったため、12月5日に再度訪問し、北野所長に、11月30日から12月5日までの行動概要を報告するとともに、以後の行動予定の再確認を行った。北野所長からは、これまでの労をねぎらう言葉を頂くとともに21世紀の友情計画の目的の完遂のため、インドネシア滞在中のみならず、帰国後も日イ両国の友好関係の発展に努力するよう激励を受けた。

(2) 在インドネシア日本大使館(11月30日)

JICAインドネシア事務所をあとにし、その隣に位置する日本大使館を訪問し、太田一等書記官(文部省より出向)、竹山広報担当官に面会した。訪問団より「21世紀のための友情計画」の趣旨及び今回のインドネシア訪問の目的、行動予定について説明を行った。大使館側からはインドネシアの概況及び日イ両国の関係について、

- ・日イ両国の関係は古く、歴史の過程で紆余曲折を経てきたが、現在は極めて強い相互 関係が確立している。
- ・インドネシアにとって日本は、輸出で約5割、輸入で約3割という部分を占め、また、 日本にとってインドネシアは輸入で第2位、輸出で第14位の主要貿易相手国である。
- ・日イ両国の経済的結びつきの大きさに比べて、国民対国民の結びつきとなるとそれ程

パイプは太くないが、インドネシアは ASEAN 諸国の中では反日感情の少ないところである。

現在、日本のことをインドネシアに紹介する機会は少ないが、今後努力をしたいと考 えている。

といった説明を受けた。更に、大使館側より、健康に留意し、本計画の趣旨、インドネシア訪問の目的を全うするよう激励を受けた。

(3) 青年スポーツ省及びKAPPIJA21(11月30日午後)

青年スポーツ省大会議室において、スナリオ大臣第一補佐官その他同省幹部数名、 KAPPIJA21代表 5 名及び訪問団を構成員としてミーティングを行った。

まず、スナリオ大臣第一補佐官より、日イ両国の友好発展のため相互の努力が必要でありその意味において訪問団の果たす役割は大きいし、インドネシア側としても心より訪問団を歓迎するという旨の挨拶が行われ、それを受けて、加藤訪問団長が、歓迎に感謝するとともに、インドネシア訪問の目的及びその目的達成のため訪問団員各々としても努力する旨の返答を行った。その後、プレセント交換を行い、記念撮影でセレモニーを締めくくった。

引き続き、同大臣第一補佐官より同省の所管、インドネシアの教育事情等についての 説明が行われた。

青年スポーツ省は、青少年の育成及びスポーツの振興についての行政を行っており、 教育文化省と合わせれば、日本の文部省のようなものであると理解してよい。青年スポーツ省の特色のひとつとしてパンチャシラ教育の推進があげられる。パンチャシラとは、 ①全能の神への信仰、②公正にして教養ある人道主義、③インドネシアの統一、④合議 と代表制による民主主義、⑤全インドネシア国民に対する社会正義の国家 5 原則をいい、インドネシア共和国憲法にも謳われている。これは学校教育にも正課として取り上げられており、多数の種族からなる人々にインドネシア国民としての自覚を持たせることが 目的である。

インドネシアの教育制度は、日本と同様の6・3・3制の上に3年制の短大、5年制の大学があるが、義務化されているのは小学校だけであるが、就学率はほぼ100%である。

同大臣第一補佐官は、日本のモンブショーのこともよく知っており、素晴しいとも言っていた。その後、「21世紀のための友情計画」にも関わる若干の質疑応答を行ったが、内容的に後で述べるKAPPIJA21との意見交換の内容と重複するので、そちらで触れることにする。

青年スポーツ省大会議室でのミィーティングの後、場所を小会議室に移し、 KAPPIJA21のメンバー20名程度と「21世紀のための友情計画」についての意 見交換会を行った。

まず、KAPPIJA21スポークスマンのヤン・ヒクサスより歓迎の言葉が送られ、それに応えて、加藤訪問団長より、感謝の言葉及びインドネシア訪問の目的等が述べられた。意見交換のテーマは前述のとおり「21世紀のための友情計画」の評価、今後の進め方ということであったが、話はインドネシア側から日本側への「21世紀のための友情計画」に関る要望が大部分であったため、これについて訪問団としては、結局は、「日本に帰って事務局に報告する」旨の回答をせざるを得なかった。 KAPPIJA21メンバーからの主な意見を、KAPPIJA21組織の概要も含めて以下に報告する。

- ① KAPPIJA21 (KELUARGA ALUMNI PROGRAM PERSAMARATAN INDONESIA JEPANG ABAD21)は、 青年招へい事業による訪日経験者の 同窓会組識であり、'85年に設立され、メンバーは4代(4ケ年間の訪日者)にわたっている。
- ② KAPPIJA21では、 年に1回の総会及び週に1回の定例会(ジャカルタ地区のみ)を行っており、総会への出席者は全メンバーの10~30%、定例会へのそれは12~15人程度であり、組織的にしっかりしている。
- ③ KAPPIJA21の現在の主な活動は、 ①日本人観光客の誘致等をテーマとしたゼミの開催、②日本の文化・社会等を紹介する展覧会(一般公開)の開催、③日本の諸団体(自治体等)から派遣されてくる青少年の世話(アポイントメント、現地行動等)等である。
- ④ 今年('88年)の2月にASEAN各国の青年招へい事業参加経験者の組織(アジャファ21)の会合があり「21世紀のための友情計画」を今後どのようにもっていくかについて話し合った。そこでは、
 - ア 専門分野別の専門的交流(例えば、教員としてひとつの枠だけでなく、小学校教員、中学校、高校と分けて、各々、小学校教育、中学校教育、高校教育をテーマとした交流)を行いたい。
 - イ 各国別編成による訪日だけではなく、ASBAN 諸国の混成グループによる訪日により、対日本だけでなく、全ASBANの交流を図りたい。
 - ウ 青年招へい事業参加経験者が再度参加しアフターケアを実施できるプログラムを 組んで欲しい。
 - エ 青年招へい事業参加経験者が今後、各国内において行っていくべき活動 等の意見が出された。
- ⑤ 毎年インドネシア国内の諸青年団体が集う総会が行なわれているが、 KAPPIJA21 としてもそれに参加して、日本をテーマにした発表を行っている。
- ⑥ 日本側にも、KAPPIJA21のような「21世紀のための友情計画」参加者(合

宿セミナー、ホームスティ)の同窓会組織の設立を期待している。そうすれば同窓会 相互の交流という新たな芽が出るだろう。

- ⑦ 活動のための財源の確保がKAPPIJA21の緊急の課題であり、日本からの援助を期待したい。
- ⑧ (圧倒的多数の意見として)日本の文化・生活を理解する、ということが青年招へい事業による訪日の重要な目的のひとつであると思うが、そのためには現在の1泊2日程度のホームスティ期間を少なくとも5日程度には延ばす必要がある。訪日中に組まれている各種プログラムの中で、ホームスティはプライオリティ№1である。

以上の他にも、テーマから脱線はするが、「日本では2~3年前に比べて自殺者が減っているのはなぜか」という類の質問も多数あり、何のデータも持参していなかった訪問団として回答に四苦八苦したが、それらの質問にいやがおうでも、インドネシア青年の日本への関心を感じさせられた。

(4) GUNUNG 05 PAGI小学校(12月1日)

ジャカルタ郊外にある小学校を訪問し、生徒の活動状況、教育施設等を視察した。

まず校庭において生徒らによる民族楽器演奏、民族舞踊、合唱、バンドドリルによる 大歓迎を受けた。この熱烈歓迎ぶりには訪問団―同甚く感動した。インドネシア訪問中 最も心に残った場面のひとつである。

その後上級生一同を前に、代表生徒10名程から日本についての質問を受けた。「日本の小学生はコンピューターで遊ぶのか」、「エレクトロニクスには日本の小学生はどの位関心をもっているのか」、「冬に日本の小学生は何をして遊ぶのか」という日本の同世代への関心からくる質問が多かったが、これらから、インドネシアの小学生が日本についてかなりの知識を有していることがわかった。逆に、日本の小学生がインドネシアについてどの程度のことを知っているのか、とも考えさせられた。

その後、図書館等の学校施設を視察した。

(5) CEVEST(12月1日午後)

JICAの協力により '83 年に設立された職業訓練施設 CEVEST (The Center for Vocational Service Training)を、JICAの技術協力現場のひとつとして訪問した。 施設の概要の説明を受けた後、施設内の各セクションを視察した。インドネシアには

他設の概要の説明を支げた後、他設内の音セッションを起源した。トライヤットには全国で約180校の職業訓練校があり、そのインストラクターとして約5,000人の技術者が必要であるが、現在約2,300人しかおらず、そのインストラクターを養成するのがCEVESTの主目的のひとつである。もうひとつの目的は、一般の技術者を再訓練することである。各セクションにはエレクトロニクスを駆使した最新の工作機械が置かれ、訓練生はその操作習得に励んでいたが、説明によれば、CEVESTで最新機械の操作を習得して世に出ても、インドネシア国内ではそのような最新機械があまり普及して

おらず、技術を活かす機会に恵まれないということであった。

施設内の視察後、日本人チームリーダーの住田氏に面会し、今回のインドネシア訪問 の趣旨を説明し、住田氏からはその趣旨を全うするよう激励を受けた。

(6) BINTARA中学校(12月1日午後)

Depok にある中学校を訪問し、教育現場の視察を行った。

ことでは、まず3年生の各教室を訪れ、各々の教室で生徒たちに、インドネシアと日本の友好関係の重要性等を説明した後、生徒たちからの質問を受けた。「日本に行きたいのだが、どうやったら我々は(JICAから)行かせてもらえるのか」といった質問も飛び出し、ことでも日本への関心の強さが感じられた。後で聞いた話だが、この中学校の教師のひとりが、青年招へい事業で訪日しており、帰国後機会があることに生徒たちに日本についての話をしているとのことであった。

その後、講堂において歓迎会が催され、生徒たちによる民族舞踊、合唱等が被露された。

- (7) 西部ジャワ州政府(12月3日)
 現地の事情により急きょ中止となった。
- (8) KAPPIJA21バンドン支部(12月3日)

バンドン在住のKAPPIJA21メンバーと公民館においてミーティングを持ち、「21世紀のための友情計画」についての意見交換を行った。3名の訪日経験者が、前に出て発表を行ったが、そのいずれも、訪日の体験談と、その中で、ホームスティの期間が短かすぎたという意見であった。その後、ホームスティにあたってのオリエンテーションを行い、訪問団員各々はホームスティ先へと向った。

ことバンドンには、「KAPPIJA21 Fans Club」なるものが存在し、そのメンバーは構成員と同様の活動を行っていたこと、そしてその各々が並ならぬ日本への関心を持っていたことを付記しておく。

(9) KAPPIJA21バリ島支部(12月6日)

バリ島在住のKAPPIJA21メンバー自体が、ジャカルタ、バンドンのそれに比べてかなり少ないこと、また、ジャカルタから速いこともあり、情報がいきわたらないことなどもあってか、活動規模は小さいようであった。

訪問団より、「JICAインドネシア事務所からバリ島在住者名簿を取り寄せ、まず、 バリ島内での連絡体制を確立すること」を提案した。

2-2 帰国青年同窓会等の活動状況

インドネシアでは、1984年の第1回目にこの友情計画に参加して帰国した同窓生の間で非公式に話合いが進められた。その結果この友情計画で培われた協力関係を継続するべきであるという結論に達した。この考えは青年スポーツ大臣とJICAのジャカルタ事務所に

も支持されて、1985年3月18日に第1回の総会が開かれ「IKATAN ALUMNI INDONESIA JEPANG」(インドネシアー日本同窓会)が正式に設立された。同時に Mr. Samusuddin が議長に、Mr. Darul Siska が書記に選出され1年間の任期を勤めた。

この1年の間に行った活動は以下の事である。まずガイドラインとプログラムの計画の草 案作成、出発前研修の準備、日本人訪問団の受け入れチーム作り、2度の日本に関する写真 展、そして次回の総会の準備である。

1986年1月30日から2月1日にかけて、ボコールのチロトで行われた第2回の総会で委員の改選が行われ、Mr. Darul Siska が議長に、Mr. Abu Hanifah が書記として翌年までの任期で選出された。又組織の名称も「KELUARGA ALUMNI PERSAHABA—TAN INDONESIA JEPANG」 - 略称KAPPIJA21 (インドネシア日本友好同窓会)に改められた。

この1年間の活動内容は、規定の批准、出発前研修の補助、日本からの3グループの受け入れ、会報(KAPPIJA21 Bulletin)の発行、1988年のアセアン同窓会会議の準備が主なものである。

1988年度のチパコングで行われた第3回総会でMr. Yan Hiksa が議長に、Mr. Syarifoedin Soeltan が書記に選出された。 又この場で規定の批准、過去のプログラムの評価、将来のプログラムの計画が発表された。

1988年の活動で何と言っても大きいものは、2月にアセアン各国の同窓会の代表者をインドネシアに集めて開いた会議「AJAFA21」である。この会議では今後の友情計画や同窓会の在り方などを幅広く論議しあった。

1987年には本部のジャカルタ以外にも中部ジャワのジョグジャカルタに KAPPIJA21 の支部が設立された。この設立記念式典にはJICAジャカルタ事務所を代表して友部氏が、 又青年スポーツ省からは第一補佐官のMr. Soenaryo が出席してスピーチを行った。 その他 にも西部ジャワのバンドンに支部があるが、その二カ所を除くとあまり同窓会は組織化され ていないようである。

財政的には毎月の会費、青年スポーツ大臣とJICAシャカルタからの援助が主なものである。現在シャカルタ地区では週一回の会合が、全国規模の総会は年一回行っているが交通 費は自前で特に地方から総会に出席する為に卒る様な場合にはかなりの負担になる。従って、 各自の所属する会社等に援助を頼む事もある。

KAPPIJA21では以下の活動を今後予定している。 日本一インドネシア観光週間、日本に関するセミナー、若者の日本にたいする認識の調査を行う。他の団体の会合に出して、インドネシアでの日本への関心を喚起する。日本への再訪を目指し、将来的に日本とビジネスクラブを設置して何らかのビジネスを行う。

ことまで述べてきたようにKAPPIJA21は更に地方での組織化を進め、 又その活動も

多様化させていこうとしている。その為にも財政の充実が不可欠であり、日本からの援助を 更に求めているのが実情である。

尚、KAPPIJA21の現在の組織を次に示した。

-ADVISOR		: Ministry for Youth affairs and Sport
		Ir. Akbar Tanjung.
-Counsellor / Guidence		: 1. Mr. Soenaryo, Drs. M. Sc.
		(First Asisten to MENPORA)
	* .	2. Mr. Rudy Johannes, SH
		3. Mr. Moh. Ismail
-Chairman		: Mr. Yan Hiksas, SE
-Vice Chairman		: 1. Mr. Beny Hamid, Drs.
		2. Mr. Patrialis Akbar, SH
		3. Mr. Choirul Anam MZD
		4. Mr. Irwansyah, Ir.
-Secretaris General		: Mr. Syarifoedin Soeltan
-Vice Secrt. General		: 1. Ms. Andromeda Anzanatari, SE
		2. Mr. Mansyur Ilyas, Drs.
		3. Ms. Anastasia SHP, Dra.
-Treasure		: Mrs. Emy Rahmiati Ismail, Bc. Hk.
-Vice Treasure	:	: 1. Mr. Dedy Mardana, Ir.
		2. Ms. Micke Sri Narukita
-Departemen of Finance	and	: 1. Mr. Yulius Ampera Kaligis
Chamber		2. Mr. Satria Gunayoman, SH
-Departemen of foreign	affair	: 1. Mr. Widya Dharma, SE
		2. Mr. Edy Saputra
	e de la companya de l	3. Mr. Herawan.

-Departemen of Development and : 1. Mr. St. Isrin Chandra, Drs.

Education -

2. Ms. Maisuri Rais

-Departemen of Social and Culture

: 1. Mr. Geis Chalifah, Drs.

2. Ms. Siti Karyati

3. Mr. Rasyid Baron Nasution

- Departemen Tourisme

: 1. Ms. Ria Zahara Putri

2. Mr. Aryo Hanggoro

3. Mr. Miswar Lubis.

-Departemen of Public Relation : 1. Mr. Yusra Kilun, Drs.

2. Ms. Meutia Ekayama Cut.

-Departemen of Organization : 1. Mr. Sofyan Ahmad, SH

2. Ms. Chamsiar AR, Bsc

3. Mr. Syaiful Ruray, SH

2-3 セミナー、交流会実施状況

(1) シャカルタKAPPIJAとの交流会

何といっても今回の訪問でお世話になったのが、ジャカルタKAPPIJAのメンバー であり、スカルノハット空港に花束を持って出迎えてくださったのをはじめに、次の目 的地バリ島に旅立つまでの7日間、朝から晩まで、多いときには15名少ないときでも 5名が、SCHEDULE会議、交流パーティ・DISCUSSION・ 学校訪問の準備、 BANDONGへの随行と、我々の案内役をしてくれる。公式の会議や討論会の交流もさ ることながら、これ以外の時間の話し合いの時間に芽生えた友情に、真の交流が持てた 様な気がする。

私個人としても、KAPPIJAのリーダーDrs. Yanhiksas とふとしたきっかけで、 意気投合し、海外に真の友人が出来たことに、喜びと驚きを感じている。

- ① 11月29日 (火) 22:00~PRESIDENT HOTEL にて KAPPIJAメンバー10数名と今後のSCHEDULE打ち合わせ会議
- ② 11月30日 (水) 14:30~青年スポーツ省にて KAPPIJAとの打ち合わせ会議

Drs. Yanhiksas と私が議長になり、KAPPIJAの活動状況説明、我々の訪問目 的説明の後、今後の友情計画をどう運営したらよいかについて質疑応答となる。 趣旨➡日本を中心にしてインドネシアを発展させることを学びたい。

- ➡MUTUAL UNDERSTANDINGを深くしたい。
- ➡戦争という苦しい体験を両国で二度と繰り返さない事。
- 意見➡「先生」というGROUP分けで無く、小学校・中学校・高等学校という細分化 したGROUP分けにして欲しい。
 - ➡もっと専門的な(例えば、技術)活動をしてみたい。
 - ➡HOMESTAYの滯在期間を長くして欲しい。
 - ➡インドネシアだけでなくアセアン諸国の混成チームにしたらどうか。
 - ➡同窓会(KAPPIJA)として、再度日本を訪問したい。
 - ➡JICAの資金援助のみがKAPPIJAの活動資金であり、毎年会員が増加する ので、資金援助の方法を検討して欲しい。
 - ➡とれからも日本から訪問されることがあると思うが、もっと良いATTENDが 出来る様に、最低二ヶ月以上前に連絡して欲しい。
- 解説➡青年スポーツ省のRuddy氏より、友情計画が5年間延長されたこと及び総数は 約150名であるが、構成内容が次の3グルーブに変更の予定であり、来年1 月にMISSIONが正式決定する旨の説明があった。
 - 第一グループ:公務員・学生・教員・YOUTH LEADER・農業・勤労青年のうちょうを選抜し、各25名。計100名。
 - 第二グループ: Special theme を設ける(例えば、 technology)
 2 theme × 1 5 名 = 3 0 名
 - 第三グループ:アセアンからグループととに集めて4グループ。 4 グループ×5名=20名
- (2) 交流パーティ 12月1日(木) 19:00~PRESIDENT HOTELT隣のビル 「友情計画のアフターケアの目的でインドネシアにまいりました。初めは成果、評価 といろいろ考えてまいりましたが、皆様の顔を見ただけで目的が達せられたような気が いたします。KAPPIJAの方々、青年スポーツ省、大使館、CEVEST、JICAの方 方、大変忙しいところご迷惑をおかけしたことと思います。お蔭様で、私達 5人は、心 に残る最大の旅が続けられています。

それから今日、小学校・中学校の子供達に逢うことが出来ました。子供達がキラキラ輝く目で私達に質問している姿を見た時、地球は一つなんだ、仲良くしなければいけないのだと想いました。これからも、インドネシアと日本の友情が永遠に続くことを祈ります。」

こんな挨拶で始まったパーティホールの中央には、各種のインドネシア料理がセット され、それを取り巻くのが、今回お世話になった人々。青年スポーツ省からは Soenaryo 氏と Ruddy 氏、大使館からは太田慎一氏と竹山健一氏、JICAから松岡次長と友部氏、 視察先の小中学校の先生方、それからKAPPIJAのメンバー約30名。楽しい談話の一時。何年ぶりかでの友達との再会。両国の踊りやら、歌合戦。

パーティ終了後も、場所を移して、楽しい語らいは続く。

「(3) セミナー「両国青年ディスカッション

12月2日(金) 13:30~ 青年スポーツ省にて テーマ [国際結婚] 青年スポーツ省の Soenaryo 氏の挨拶、日本側の挨拶、これに続きKAPPIJA のメンバーでもある弁護士の Zulpadli Barus 氏の基調講演。その後 discussion に入る。 基調講演の趣旨;

国際結婚で大切なこと➡①文化の違いを超えること。② learning together ③両国のかけ橋となること。

国際結婚の problem 🖜 ①宗教の問題 ②習慣、歴史の違い

ちょうとインドネシアでは日本女性(Matumi?)がインドネシアに嫁ぐという事で T.V. 等に報道されていた時で、テーマとしては面白かったのであるが、音響(放送) 設備の調子が悪く、今一つ質疑応答に、盛り上がりに欠けてしまったのは残念である。

(4) BANDONG KAPPIJAとの交流会

12月3日(上) 15:00~GELANG GAANGにて

今回の訪問の目玉でもある、ホームスティの労を取ってくださったのが、BANDONG のKAPPIJAである。我々の訪問の知らせが直前であったため、準備が出来ず迷惑をかけるとのWAWAN(リーダー)の挨拶があったが、とんでもない、とても良くやってくださった。日本人と大変よく似た情感を持つ家族に温かく迎え入れられ、楽しいホームスティを体験することになる。

インドネシア人は時間にルーズと言うのではなくて、正確には時間に関して PUNCTUALという概念が無い。BANDONGに着く頃には、 我々もインドネシアの 時間感覚に慣れ親しみ、次の行動に移るまでの「待ち時間」がやたらと長いのであるが、 さほど気にもしなくなっていた。

BANDONG到着次第、州政府表敬になっていたが(これに間に合うよう早出してきたのであるが)、中止となった。しかし、我々はさほど気にしないのである。そこで昼食を食べながらの懇談となる。そして又、例の「待ち時間」の後、DISCUSSIONとなる。

Drs. Bachrudin と Nurhaida が代表して、意見発表。

意見→友情計画の方法改善。小・中・高・大学別に区分したほうが良い。

- →HOMESTAYを長くして欲しい。最低一週間。HOMESTAY 家族ともっと 話し合いたかった。
- ➡通訳が、正確に話を伝えてくれなかった。

- ➡友情計画で日本に行った証明書を出して欲しい。
- ➡KAPPIJAの活動資金を予算化(定期的)して欲しい。
- ➡再度日本を訪れたい。
- (5) バリKAPPIJAとの交流会 12月6日(火)~

バリに着いてから Ida Ayu Astiti に電話するが連絡がなかなか取れず、合うことが 出来たのは、夜の 7 時頃であったため、夕食をとりながらの交流会となる。バリ KAPPIJAのメンバーは 1 2 名程いるそうであるが、組織化されていないため、同窓 会として活動はしていない。勿論、我々の訪問した目的も知らなかった為、今後 MEETINGを行ない、組織作りをお願いする。翌日は、KAPPIJA のプラバ嬢のお 父様がマイクロバスを用意して下さり、バリ市内の観光をしながら交流をはかる。

2-4 ホームスティ実施状況

<ホームスティ等についての感想>

吉岡 禁治

成田エアポートレストハウスに加藤氏と前泊し、夜に鹿沼氏と3名で明日から10日間のインドネシア訪問について、最終打合せを行なった。11月29日午前9時15分成田空港でメンバー5名がそろう。さっそく手続きを開始し、ガルーダ・インドネシア航空機は滑走路を動き始めたが、具合の悪い所が見つかったため修理場に向かう。整備が完了するまで3時間機内にとじ込められ、これからの前途が思いやられた。

スカルノ・ハッタ空港から外へ出ると、我々を出迎えてくれたのは、今年来日した
KAPPIJA-21メンバー中心の7名であった。 時間は午後8時頃であったが、たいへん
暑く湿度も高いように思えた。熱帯の国での汗と冷汗の9日間の旅が始まったのである。

午後10時過ぎ頃、我々5名はまだ寝るには早すぎるということで、成田で買ったウイスキーを飲みながら今後の打合せをしようということになった。"アフターケアとインドネシアをより良く知るため"という目的を再確認し、また報告書の重点を、それぞれ各人が変えようということで、私はホームスティ期間を担当することになった。事もあろうにである。というのは、普段でも家には寝に帰るだけ、日曜日は家でごろごろ、どこに何が置いてあるかもさっぱり解らず、我家を考えたことがなかったのに、他国に来てその生活習慣を報告するとは思ってもいなかった。

翌日、日本大使館を訪問し、一等書記官の太田さんと竹山さんにお会いして対談した中で、 我々がバンドンで2日間ホームスティをする予定であることを話したら、「それはたいへん ご苦労さまです。」というので、一瞬いやな予感がした。またトイレットペーパーは使わな いというので、この国の人の仕方を教えてもらった。また、バンドンはジャカルタから南東 へ200km、標高は700 m ぐらいにあり、気温はジャカルタよりも3~4度低くしのぎや すい。人口は150万人位で西ジャワ州の州郡であるということであった。

12月3日午前8時、JICA事務所の友部氏、通訳の黒田氏とロビーで待合せをして、 さっそくマイクロバスに乗って由発した。今日からバンドンに移り2日間のホームスティを 体験することになるのだ。日本大便館で聞いたあのいやな予感のする"それはたいへんご苦 労さまです"を思い出しつつ、気の進まぬままのバンドン行であった。

前日の午後4時頃になって、バンドンにある西部ジャワ州政府表敬訪問が午前11時に変 更になった。それまでは朝9時の電車でバンドンに行くことになっていた。我々は、まあし ょうがないでしょうと予定の変更を承諾した。マイクロバスには友部氏、黒田氏、

KAPPIJA-21メンバーである女性3名 (エリアナさん・ラティさん・イダさん)に我 我5名の計10名が同乗し、一路バンドンに向かった。ジャカルタ市内から、日本の開発援 助で建設中という高速道路を通り、一般道路に入った。一般道路は幹線ということもあって か、おおむね整備されており、悪い道という印象はなかった。加藤氏と私は朝食を取ってい なかったので、途中、車を止めてバナナとリンゴを買ってみんなで食べた。バナナはもとよ り南国のリンゴは確別であった。その時気付いたことであるが、そこには物売りと物乞いが 多勢いて、物売りは若者、物乞いは年寄であった。それにしても同乗している女性達との生 活レベルの違いを見た気がする。とにかく貧富の差がはけしいことは確かなようだ。

- 私達のマイクロバスは予定通りバンドンのホテル(PANGHEGAR HOTEL)に着きロビ ーに入って待期したが、州政府の表敬訪問は対面者不在のため中止となってしまった。青年 会館に荷物を置き、昼食を食べに市内の山手にあるレストラン(BABAKAN SILIWANGI) に食事にいった。いかにも南国という情緒たっぷりの作りで良い雰囲気であった。これで食 事も我々に合う味であったらどんなにかよかったろうに、味が今一であった。午後3時30 分頃青年会館にもどり、ホストファミリーとの顔合わせをした後、話し合いをした。そこで 渡された資料によると、我々は次のようなことになっていた。

加藤氏

WAWANさん宅

多田氏

ASRULさん宅

宮崎氏

N I K N I K さん宅

野内氏

WINK さん宅

吉岡 ARYOさん宅

じかし、多田氏と私のホストファミリーは現われず、変更となり、多田氏と私は BACHRUDIN (バフルディン)さん宅に行くことになった。 午後 5 時過ぎにホストファ ミリー宅に入った。シャカルタから来た8名位の人もバフルディンさん宅に入って来た。あ いさつを済ませ、くつろいでいると泊まる部屋に案内してくれた。部屋は6畳程の広さであ る。多田さんは荷物を持って入った。私にも荷物を中に入れなさいというのでそれに従う。 後で聞いてわかった事だが、私のホストファミリーはことに迎えに来てくれるのではなく、 私もバフルディンさん宅にお世話になるのだということであった。さっそくマンディを進め られたので、多田氏、私の順に入った。ふろ場は45畳より少し狭いくらいで、洋式のバスがあり、湯も出るようになっていた。その横に洋式の便器が置かれていた。バスに入ってもよいと言われたが、我々はマンディを試みることにした。中に入ると脱衣所もカゴも置いてない。後で聞いたら釘が壁に打ちつけてあり、そこに脱いだものをつるしておくのだそうである。シャワーを浴びた時のようなさっぱりした感じであった。居間に座ってタバコを吸いながら、ワン、ペウス、ファイサル、ヤン、デディ、ディアン、エリアナ、イダ等シャカルタから来てくれた人達としばらく話しをしていた。その後夕食をごちそうになり、市内に古くから伝わる民族芸能チャルン(CALUNG PEMUDA Y 1988)の競技大会を見に行くことにした。もちろんバフルディンさん夫妻と4才になる長男も一緒である。

会場に入ると満席に近く大盛況であった。5~6名のグループが30分程の持ち時間で、 竹製の楽器を演奏したり、とぼけた話をして客を笑わせたりして、一生懸命競いあっていた。 審査委員と思われる人が4名、ステージと客席の間にいた。司会者らしき人が、インドネシ ア青年との友情交流で、日本青年がこの会場に見学に来ている、というようなことを言って いた。次から次へと出場者が交替していった。ジャカルタから一緒に来た友人

KAPPIJA-21の一人に何と言っているのか聞くと、スンダ語で話しているらしく、何を話しているのかわからないと言っていた。それにしても、話している感じ、動作など日本人のそれと程んど同じであり、もし日本語で話していれば、日本人が出演しているのだと見ている日本人は思うであろう。またこの時頭に浮かんだのは、沖縄の景色である。屋根の色は薄茶色が多く、家の作りなども似ており、これでヤシの木がなかったら本当にそっくりである。日本人のふる里に居るような感じになったのを覚えている。

午後11時30分頃外へ出て近くの屋台で、ピサン・ゴレン(バナナの天ぷら)、タフ・ゴレン(揚げ豆腐)を食べ、インドネシア風コーヒーを飲んだ。夜中になって半袖シャツー枚の私には、ちょうど心地よい気温であったが、シャカルタから来た友人遠は、セーターを着たり、長袖シャンパーを着たりして寒いと言っていた。

翌朝、朝食をすませ10時に青年会館にホストファミリーと共に全員集合し、タンクバンプラフ火山口に観光に行くことになっていた。多田氏、エリアナさん、イグさん、私の4名はASRULさんの車(ホンダンビックの新車)で先に出かけ、ASRULさんの家に寄ってから、10時に青年会館に集まることにした。ASRULさんの家は、現在建築中であった。3階建の大きなもので、1階部分は完成しており店となっていた。事務用品と書籍を売っていた。近代的な店で品物も日本製、西ドイツ製などもあり、かなりの品揃えであった。バンドンではトップクラスの店であると言っていた。2、3階部分はまだ建築中で、家族が住むことになっているとのこと。部屋数は10以上あり、鉄筋コンクリート造りのかなり良いものであった。ASRULさんは、現状がこれなので我々に泊まってもらう予定であったが……。と申し訳なさそうに言っていた。

青年会館に行くと、まだ地元の人が何人か集まっていないと言っていた。 ASRUL さんの車で、多田さん、イダさん、黒田さん、私の5人は先に行くことになった。山道の途中に売店があったので、そこで待つことにした。イダさんは車から出ると車道に座り込んでしまった。私が、日本では若い女性が道路に座るなんてことは行儀がよくないことだ、と言ったら、ここは日本ではない、インドネシアだからいいんだ、と言って立とうともしなかった。売店では、私はビールを飲んだ。黒田さん、イグさんは缶コーラを飲んだ。多田氏は風邪をひいたらしく体が重そうで車から外に出なかった。10分程待っても米なかったので出発した。山頂の駐車場に到着すると、すでに他の人達は来ていた。どうなっているのだ。硫黄の臭いがたちこめ、火口付近は木も生えていない。規模はそれほど大きくなく、草津白根山のそれより大分小さかった。みんなで写真を取りあって下山し、途中の温泉が涌いているレジャーランドのような場所で30数名一緒に昼食を食べた。ここでも我々はまずビールを注文した。関内は日曜日ということもあってか、かなり混雑していた。青年会館にもどり、夕食後ディスコに行くということも別れ、バフルディンさん宅に帰る。マンディをし全身を洗ってさっぱりすると夕食となった。食堂に鏡があるというので、そこで整髪料をつけるとみんな注目していた。エリアナさんは、お父さんが同じのを使っているといっていた。

「いただきます。」と言って、おかずを皿に取り、葉をむくと魚らしいが異様な匂いがし、少し口に入れてみると異様な味がして食べられない。それではということで、やはり葉に包んである別のおかずをむくと、これまた異様な匂いと味で全然だめ、それではとスープを少しかけてご飯だけでもと思ったが、これもあまり食欲をそそる匂いと味ではない。何も食べないと体力がなくなるので、持ってきた梅ぼしを出して、我が友人達にもヘルシーフードと言って食べてもらい、それで私もようやくご飯だけ食べることができた。梅ぼしを2つ、3つと食べたのは私の他にはいなかった。

ディスコには若者が多勢集まっていた。我々は例のごとくビールを注文し、地元の人達は 始んどの人がシュースを注文し、飲んだり踊ったりした。私もなれないかっこうで踊って動 いて)みた。話しもはずみ午後11時30分頃になって解散となり、それぞれのホームステ ィ宅に帰ったが、私とバフルディンさん他シャカルタの友5人が残ったので、もう一軒行く ことにした。日本にはない変わったシステムの店であったが、男性7名で地元の見知らぬ女 性7名と友情を深めた。バフルディンさん宅に帰ったのは午前2時を回っていた。

翌朝の朝食は小海老をから揚げしたものと、小魚を干して乾燥させたものであった。これは匂い味共にたいへんよく、たくさん食べてしまった。10時少し過ぎて駅に着くと全員集まっており、バフルディン家の人達と別れをおしみ、電車に乗った。車内はほぼ満席に近かった。冷房もきいており快適である。ジャカルタから来てくれた友人と私達で話したり、さわいでいると、ジャカルタまでの時間がほんの瞬間のようであった。この2日寝る間もおしんで活動したように思えたが、過ぎてしまうと短いようでもあった。しかし一緒にジャカル

タからつきあってくれた友人達、それに何よりも我々のために一生懸命世話をしてくれたバンドンのホストファミリーのみなさんの友情に対して強い感謝の気持が沸いてきた。人間として同じ時代に生き、同じ感情を持つ日本人のふる里のような所で、地理的な位置が違うだけで、貧富の差がついてしまっている。我々日本人と接して、この国の若者の本心は今何を考えお互い誓い合っているのだろうか。私には見えて来たような気がする。そして、それが少しでも早く実現するために、我々は何か手を貸すことができるのだろうか。

日本大使館で聞いた、あのいやな予感のする言葉も、今は心地よい響きに変っていた。

<ホスト家庭でのホームステイ情况>

<私の泊まったバブルディンさん宅>

☆ 家族構成

バフルディンさん夫妻と子供2人(4才男児、2才女児)それに祖母の5人家族であった。

☆ 家の配置

玄関から中を見た状態で説明すると、右に6畳程の広間があり応接セットが置いてある。左は私達が泊まらせてもらった6畳ほどの部屋があり、中からカギがかかるようになっており、ベットと机があった。その隣り奥は居間があり広さは18畳程である。そこにはテレビとステレオ(ミニコンポ)がおいてあった。その右側に2部屋あり、バフルディンさん家族がふだん使っているようである。さらに左側奥に浴室兼便所があり、その奥に10畳ほどのキッチンがあり、右側に食堂があった。食堂はかなり広く、一部は屋根がなく吹抜となっており、その下は池と草花、木が植えてあり、風流な作りであった。

☆ 食事

ジャカルタ、バンドンの市内レストランで食べた時と同じように、皿の上にご飯を盛りスープをかける。おかずは3~4品あり、自分の好きなだけ皿に取って食べる。いつも出るものに、日本のやわらかいせんべいの後な、油で揚げたものが出た。食べ方は、スプーン、フォークそれに手を使って食べる。私も手で食べることを試みたが、なかなかうまくいかなかった。また、ナイフは使わないとのことであった。

☆ マンディ(水浴)

朝と外出から帰って来るたびにするようだ。トイレと同じ部屋にあり、トイレットペーパーはない。日本大使館で教えてもらったので、私も2度ペーパーを使わないで、インドネシア流にしてみた。馴れればこれも良いかも知れない。

☆ その他

気候についてはとにかく暑い国である。日本の夏から冷蔵庫と冷戻設備をすべて取払った状態を想像してもらえばそれに近いと思う。とにかく体の休まる所がない。頭が

ボーとして細かい気便いなどは、どうでもよくなってしまう。時間に多少ルーズなと ころもあるが分かるような気がして来る。

衛生面では、街に出ると屋台があちとちに無数に出ている。地元の人達はそこで食事をしたり飲物を買ったりしているが、暑い国だけに衛生面では心配であった。

食事の味付についてはかなり日本と違い、特にホームステイの2日目の夕食は、匂い、 味とも合わず全然食べられなかったほどである。

☆ 残念だった事

ホストファミリーとの話し合いが殆んどできなかったことである。昼は観光、夜は芸能を見に行ったり、ディスコに行ったりで、朝・夕食と寝るだけの時間しかなかった。 おまけにジャカルタから共に来てくれた友人達のうち8名程が一緒にホームステイし たため、昼も夜も落着いて話す時間がなかった。

3、 訪問国における青少年団体の活動状況

インドネシア共和国は、パンチャシラ(建国五原則)を哲学的土台として1945年の憲法 に基づいた民主主義をとっている。パンチャは<5>シラは<原則>を意味し

シラ 1. 唯一の神への信仰 (神の信仰)

シラ 2. 公平に文明化された入間性 (人道主義)

シラ 3. インドネシアの統一 (民族主義)

シラ 4. 代表者達の熱意による民主主義 (民主主義)

シラ 5. 全インドネシア国民の社会的平等 (社会正義)

として、この実現をめざして近代化政策を推進しながら、青少年の育成に努めている。すなわ も、国家建設にとって重要な位置を占める青年の役割を認識させ、国内と国際理解を深めるべ きであるとして、全インドネシア青年層を集結し、インドネシア政府の強力な支援の基に結成 され、政府がインドネシア青年を代表する唯一の機関として認めた機関が<インドネシア全国 青年協議会>(K.N.P.I.)また、インドネシアに於て、少年少女層を組織し活動しているのが <インドネシア民族プラムカ連盟>(PRAMUKA)である。

〈インドネシア民族プラムカ連盟〉 PRAMUKA

各国にあるボーイスカウトとガールスカウトを一つにまとめインドネシアらしい独特の 民族形態にした少年少女組織の最大のものでありオランダ植民地時代からの古い歴史をも つインドネシアで最初の青少年組織である。ボーイスカウトとガールスカウトの教育・訓 練によって高い品性と人格をもった人間形と共に、バンチャシラ精神をみにつけた国民の 育成を目指している。このプラムカへの加入は各国のボーイスカウトなどと同じように任 意とされているが、町村単位や、学校単位で加入という集団加盟のケースが多く、小学生 の場合は、ほぼ全員が加入しているようであり、激しい訓練によって、次代をになう若者 をひとりでも多く育てようと努力がなされている。

〈インドネシア全国青年協議会 〉 K.N.P.I.

K.N.P.I. は1945年の憲法に示された、国家の理想・目的に対する青少年の使命及び役割を、責任をもって遂行する組織として、1973年7月23日に設立された。この日、学生組織や"代表者66"など14の青少年団体、34名のリーダーによって"青少年宣言"が調印され、ことにK.N.P.I.が誕生した。

K.N.P.I. は、国の内外においてインドネシアの青年を代表する唯一の機関であり、青少年活動の中枢としての機能を持つと同時に、青少年の間に存在する社会的・文化的背景の違いから生じる考え方のちがいを取去り平等で調和のとれた協力を集結し、統一的意志を固め、青少年の国家発展への積極的な参加を呼びかけている。K.N.P.I. の会員は原則的にはすべてのインドネシア青年を会員としており、後援者として、大統領・副大統領・内務省大臣・教育・文化省大臣・情報省大臣・国務省国家書記があげられている。組織的には、中央委員会を首都ジャカルタに置き地方実行委員会を全27州に、地域実行委員会を全301の地域に、地区実行委員会を3,000地区に設置した。

活動としては、政治・経済・社会・文化・防衛と安全の五つを目標とし、

- リーダーシップ養成プログラム
- 創造性、生産性向上のための技術訓練プログラム
- ・国家意識を高める政治教育
- ・パンチャシラの原則に基づいた価値の高い人間性を持つ責任力のある幹部養成プロ グラム
- 青少年の知性と知力を養うプログラム
- 作業、レクリィエーション、小旅行などを通しての文化活動
- 健康促進及び生活環境作りプログラム
- 文化鑑賞の目を養うプログラム
- ・協同組合に関する学習
- ・特に学校中途退学者や身体障害者が、何らかの職業技術を身につけられるような職業訓練プログラム
- ・海外、特にアセアン・太平洋諸国の青年団体とのショイント活動 などのプログラムを活発に展開している。

インドネシアにおいて青少年活動の中心となっている団体として、<インドネシア全国 青年協議会(K.N.P.I.)>と<インドネシア民族プラムカ連盟>、をあげたがその他の 主たる団体をあげると

インドネシア・ユース・ホステル連盟 国と民族、自然を愛する心を養い、友情の絆を (IYH) 強める。 コネスコ・クラブ・インドネシア

(UCI)

コスゴロ青年

(GEME·KOSGORRO)

インドネシア開発青年

(GMPI)

穩健派青年

(AMPI)

全国学生運動

(GMNI)

民族間の友好、平和と福祉、人道主義教育を推 進する。

民族のための使命を遂行するため貢献しようと する青年の、利益と福祉をはかる。

専門と機能に応じ、具体的活動を進める。

学校外活動、文化、スポーツ等

学校外活動、学習、地域社会、社会参加、学生

印心

などがありさらに、インドネシア農村青年開発運動(GPPDI)、インドネシア民主青年、パンチャシラ青年などがある。また、インドネシアにおいては、イスラム教を始めとする、

イスラム学生協会

大学生を組織した、学生の宗教活動、社会改革

(HMI)

を目指す。 約400万人

ベムダ・ムハマディヤー

回教に根ざしたカウンセリング活動

約300万人

ムスリム青年運動

イスラム教に基づいた人格形成を目指す。

プロテスタント及びカトリックのキリスト教、ヒンドウ教、仏教など、各宗教ごとに全国組織の宗教青年団体が多数存在する。

しかし、インドネシア国内の末端までのびる強力な組織力と活動力を誇る<インドネシア民族プラムカ連盟>及び<インドネシア全国青年協議会>(K.N.P.I.)のふたつの組織がこの国を代表する青少年団体といえるであろう。

4. 青年招へい事業に対する相手国側の評価

この青年招へい事業に対する評価を相手別に述べていくとする。

まず最初に訪れた青年スポーツ省の第一補佐官Mr. Soenaryo は、 この事業はインドネシアと と日本、アセアン諸国の相互理解と発展の為にとても重要だとしていた。

しかし、日本のホームステイ受け入れ家庭がインドネシアの事をあまり知らず、さらに日本 自身の歴史などについても知らないという点には厳しい評価を下していた。

次に同窓会KAPPIJA21は、勿論この組織は青年招へい事業に参加した同窓生からなっているので、この事業に対する評価は高い。それも、Mr. Soenaryoが考える様にインドネシアと日本、アセアン諸国の相互理解と発展の為という点からだけではない。何故ならかれらの話によれば、この事業で日本に行ってきたことにより、大学生ならば単位が与えられ、就職の際にも有利になり、社会人ならば昇進に役立つという実生活面でも有益であるからである。

しかし、こういう評価とは裏腹に、毎回プログラムの内容が似通ってマンネリ化してしまっている。また日本での行動が単なる物見遊山に終わってしまっているので、もっと専門的、高度な技術を学ぶ事も行程に採り入れるべきなど、やはり厳しい評価をしている面もあった。

以上の事を考えてみると、全体的にこの事業にたいするインドネシア側の評価は高いがこれ から更にその評価を高め、定着させていくには、今後解決してゆかなければならない問題が多 い様に思われる。

5. 調査チーム参加者の感想

今回インドネシアに行くという話が決まった時、実は大変嬉しく思いました。何故なら2年前にインドネシアを訪れた時、又日本でインドネシアの人達との合宿セミナーを通じて生活した時、その優しさと謙虚な姿勢がとても好きになっていたからでした。

11月29日にいきなり飛行機が故障で3時間遅れてしまいましたが、KAPPIJAのメンバーがいやな顔一つもせずに温かく迎えてくれました。その後もバリに行くまで面倒をみてくれた事には本当に感激しました。

彼らの考え方にも関心させられた所が多々ありました。それは彼らが社会の上層部を形成しているという事もあるのでしょうが、自分の将来や更には国の未来の発展の為に、何を自分達がすべきかという考えをはっきり持っている点などです。

今回の訪問で印象に残った物の一つは、やはり、学校を視察できたということでした。私は 大学時代教職課程をとっており、一時は本気で教職を目指していたので、この事を前から楽し みにしていました。そこで見た生徒達の瞳の輝きと生き生きした表情から、この国の持つ活力 と、その将来に向けた明るい希望が感じられました。

ホームステイの実施状況と重なってしまうのですが、初めて経験したインドネシアの家庭の 雰囲気は忘れられなくなりました。

最初私のホームステイ先のお父さんが、戦時中に日本軍の工場で働いていたという事を聞いた時、はっきり言って私は不安を感じずにはいられませんでした。しかし、家に帰ってきたお父さんがしまっていた日本人の上司や同僚との写真を出してきて、時折日本語を交えながら、当時のことを懐かしそうに話す姿を見て安心しました。その後は私を家族の一員の様に扱ってくれ、温かい家族団欒とお母さんの手料理、朝晩のマンディ、夜は夜餐の棚を叩く音や、カキリマの音を聞きながら寝るというホテルに泊まっていては味わえないものが沢山ありました。

又、インドネシアの人々が伝統を大事にするという所にも感銘をうけました。小学校に行った時に演奏してくれたアンクルンという竹の楽器は、音楽の授業で必修になっていると聞きました。バンドンではチャルンというスング地方伝統のコメディ舞踊のコンテストを見せてもらい、これにも若い人達が積極的に参加しているのを見るにつけ日本の伝統芸能などの現状と思わず比較せずにはいられませんでした。

とにかく、今回の訪問は私にとって楽しく有意義な事ばかりでした。友人もたくさんできた ので、是非又インドネシアを訪れたいと思います。

飛行機で約7時間、ジャカルタ・スカルノーハッタ国際空港に到着、入国の手続きをおえて飛行場のロビーから表へでると予定より3時間も遅れて到達したにもかかわらず10名近くの青年達が出迎えにきてくれていた。あたりはすっかり暗くなっており、南国の熱気のなかひさびさに見るインドネシアの青年たちの笑顔が印象的だった。結局彼らは、飛行場で4時間近くも我々を待っていてくれたことになり、本当に頭の下がる思いでいっぱいだった。この調査プログラム中、常に6~8名のインドネシア青年たちが、自分たちの職場に休暇をだし、学校を休んで、あるいは飛行機に乗ってジャカルタに駆け付け、朝から深夜に至るまで、親身になって我々の世話をしてくれた。彼らの、少しでも多くインドネシアを見てもらいたい、少しでも良くインドネシアを理解してもらいたいという気持ちが、強く感じられ、これにどうやって答えるべきなのか戸惑っているうちにジャカルタでの日程は終わってしまった。バンドンでの暖かい持てなしも、あっと言う間に過ぎてしまい、バリ島に到着したと思ったらもう機上の人となってしまったような、一日一日がことさら短く感じられた十日間であった。

彼ら個人個人の考えていること、日本滞在中の感想を理解するにも、また私たちの気持ちを うまく伝えるにも時間があまりに短かかったようにおもわれた。十日間という日程は、確かに 我々日本人のしかも社会人にとっては長期間の日程と言わざるをえないが、国際交流という面 からも又、意見聴衆という面から見ても、もう少しじっくりと青年たちと話をしたかったよう に思っている。

今、このレポートを作成するに当たってインドネシアについての感想として思い浮かぶのは、シャカルタの近代化された都市でなく、バンドンの緑の町並みでもなく、バリ島の美しい夕日でもない、確かにそれぞれ美しく感動的な風景であるが、こんかいの調査において、わたしに最も強く印象を残してくれ、わたしの意識の中に思い浮かぶのは、我々と行動を共にしてくれた DERI、 ERI、 YANHIKUSASU、 DIAN、 ASULLU、 RATI、 MIKU、 BUHULDINらインドネシアの青年たちの優しい笑顔ばかりである。

最後に、我々のために骨折ってくださった勤労厚生協会の鹿沼氏、JICAシャカルタ支部の友部氏にお礼を申し上げます。

訪問の主要行事の大半を終了し、バリ島の真夜中の海辺に寝ころんで星を見ていた。天の川さえはっきり見える満天の星空が美しかった。日本の星数の優に10倍はあるかと想われた。 人が星を見上げる時いつも考えることは、宇宙の広大さと己の卑小さである。 星を見ながら考えた。日本とインドネシアの事を。惑星の一つに過ぎない地球の中の友好関係を。豊かな国と、貧しい国を。貧しい国の中の貧富の差を。DUTY-FREE SHOP で札束を振り回し高級品を買いあさる、円高差益で外国にのみ強い金を持っているだけの日本人の事を。国を想い、明日のインドネシアを語りかけるKAPPIJAの若き獅子(ハリマオ)達の事を。

星を見ながら気がついた。今後の友情計画で必要な事は、「国際結婚」のディスカションで、 Zulpadi 氏があげた3つの大切な事と同じであるという事。

① Learnig together ② 両国の懸け橋となること ③ 文化の違いを超えること

6. 提 营

(1) ここでは単に自分の意見という事柄だけではなく、インドネシア側の要望で実現可能なものをあげてゆきたいと思う。

まず手近にできる事と思われるのは、日本のホームステイの家庭にインドネシアや、インドネシアと日本の関係、又日本の歴史についての知識を持ってもらう事である。これは以上の事を記述した冊子のようなもので日一英(又はインドネシア語で)対訳のものを事前に配布しておけば良いと思われる。

次にこれも可能だと思われるが、教員グループは幼稚園から大学の先生まで色々な人がいるので、できればインドネシアで教えているのと同じ段階の学校ごとに分けて視察させてあげたほうが良いと思われる。

それから最後に、彼らはこの事業で日本に来たという証明書を欲しがっているので、現 在の文書の様なものでなく、彼らの意に沿った形の証明書の発行を希望します。

(2) 国際的な交流・国際理解というものはお互いに行き来して初めて生まれてくるものなのではないだろうか。日本にアセアン諸国青年を招へいするこの事業は、物の時代から人と人との繋がりの時代へとアセアン諸国と日本との新しい時代・新しい関係へと橋渡しをする事業であるともいえよう。

人と人との繋がりのなかでお互いに行き来することが大切であるとするならば、日本の 青年も、もうアセアンへと出むいてゆき、観光ではない本当のアセアン諸国を見る時期が きているようにおもえた。出来得るならば日本からも毎年、今回の我々のような調査団や 交流の機会をつくりアセアン諸国へ日本の青年たちが訪れ交流をし友情を深めることをの ぞむ。

(3) 我々はインドネシアを知らな過ぎる。米国から日本へ、日本からインドネシアへという情報の流れは大きい。しかし、逆の流れは極めて小さい。技術力や経済力の落差が自然に流れの大きさを決めるのであろうか。

Learning together の原則どうり、帰国反省会よりも(レポート提出もあるのだから)、

事前研修が必要である。

これは、私自身の反省であるが、言葉に関しては、英語が国際語であるからというより、 少しでもいいからインドネシア語で話そうという努力が必要である。

毎年会員が増加することが明らかであるKAPPIJAの活動資金を、必要な都度出すのではなく、予算化すること。

我々は日本の代表としてではあるが、あくまで民間団体として参加し、民間 S I D B として、今後の友情計画の発展の為に努力し、行動したつもりである。

(であるから、少なくとも、帰国報告会でされた様な、我々の費用をどこの予算から出すかという様な問題に巻き込んで欲しくない。)

民間SIDEに希望する、これ以外の訪問趣旨があるならば、訪問前に徹底させるべきである。

(4)

- ① 我々を常にもてなしてくれたKAPPIJA-21メンバーは'86、'88年の学生及び勤労者が主な構成員であった。この人達は日本に対する興味がたいへん強く、また日本を今後もよく理解してくれる人達ではないかと思う。日本で買ったシャツを着ていたりしていた。メンバーの中でも、この熱心な人達に今後何かできないものであろうか。この人達が中心になってOB活動をもっと活発にしてくれると思う。
- ② 各地方のJICA-PROGRAMメンバーの活動を活発にするためには、国土の広さ、 経済力等を見たとき、資金援助は必要ではないかと思う。ジャカルタ及びバンドンのリ ーダーも盛んにそれを訴えていた。全員でなくとも、活動に熱心な人達を選定して今後 を考えても良いのではないか。
- ③ 今後毎年日本から、インドネシアに行くのであれば、勤労青年、あるいは学生が日本 に来る直前に行ってKAPPIJA-21メンバーの人達と一緒に現地で会って来たらど うであろうか。その人達が日本に来て、現地で会った日本のメンバーが向かえてやれば、 いっそう印象深くなり、後の活動にも参加してくれる率が高くなるのではないかと思う。
- ④ 今後を見越した場合、インドネシアからKAPPIJA-21メンバーの人達が日本に来る機会もあるかと思う。また今後JICA-PROGRAMにより来日する人達のために、日本側のOB活動も進めて、受入れのための援助をしてあげたい。

また再度自費で行く人が出るかも知れないが、その時に何らかの便宜を計ってもらいたい。

インドネシア側 O B の我々に対する受入れ体制は未熟ながら、相当の熱意を持っていた。

今後両国でこのOBの熱意の差が出てしまうのは、意識(心)の問題として、好ましくないのではないだろうか。

⑤ 日本の事をもっと知りたい。日本の青年についての本を送ってほしい。日本がどうして今のように発展したのか知りたい。これから日本はどうするのだ。もう一度日本に行ってみたい、そして今度はこういう所を見たい。日本はアメリカや西欧ばかりに目を向けている、我々の方も向いてほしい。等々前向きの熱心な青年の声が伝わってきた。少しでも、できる事から始めてほしいと思います。日本からのアフターケア・プログラムは始まったばかりですが、この機会を捉えて出来る事があると思います。

以上で報告を終ります。

最後に、このプログラムは私にとって、今までの海外旅行とは違う貴重な体験旅行となりました。今後とのプログラムが増々発展することを祈ります。また勤労厚生協会の理事長さん、 鹿沼さん始め、多くの人達のご理解とお骨折りに対して深く感謝申し上げます。また貴協会始め関係者の方々の限りない発展をお祈りいたします。

以 上

マレイシア

 $S.63.11.22 \sim S.63.12.1$

(財)世界青少年交流協会

1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

①リーダー ★ 安田忠正 地方分野プログラム実施担当者(大阪)

②メンバー ☆ 駒井真弓 合宿セミナープログラム担当者(東京)

③ " ☆ 松井真智子 地方分野 (ホームスティ)担当者 (富士)

④ "★ 佐藤恒雄 共通プログラム (ICSC) 担当者

⑤ 〃 ★ 丸山良雄 中央実施団体プログラム担当者

1-2 調査日程及び主要面談者

	月日 滯在地	時刻	プログラム	主要面談者(宿舎等)
1	1988年			
•	11月			
	22日(火曜)			
		14:00	事前研修会	
	東京	17:30	赤坂東急ホテル発リムジンバスにて	
		19:30	成田空港着	·
			搭乗手続 出国審査	·
		21:35	成田空港発「マレイシア航空MH95便」	
				(機中泊)
2		3:30	クアラルンプール (スバン国際) 空港着	同窓会(PAMAJA)
		4:30	ホテルホリディーイン (オンザパーク)着	出迎え
	23日(水曜)	5:00	日程オリエンテーション	
	· '	6:00	朝食	
		10:30	JICAクアラルンプール事務所表敬訪問	岡部所長、酒井氏
		11:20	在マレイシア日本大使館表敬訪問	小池公使、伊藤書記官
		12:30	JICA主催昼食会	林次長、酒井氏
		13:30	宿舎着	
		14:30	人事院(PSD:PUBLIC SERVICES DEP-	アジザン氏、ワハブ氏
			ARTMENT) 表敬訪問	シャリファ女史
	クアラ	16:30	宿舎着	シティ女史
	ルンプール		日程打合せ	
		18:00	同窓会メンバーとの打合せ	
		19:00	夕 食(同窓会メンバー)	
			クアラルンブール市内散策	
		22:00	宿舎着	
				ホテルホリディーイン

^{*}時刻は現地時間

	月日 滯在地	時 刻	プログラム	主要面談者(宿舎等)
3	24日(木曜)	8:00	朝食	
		9:15	クアラルンプール市内見学	
			中国人街、インド寺院、首相官邸、独立記	
			念碑王宮、国立博物館、国立イスラム寺院、	
			中央駅	
	クアラ	12:30	昼食	
i	ルンプール	13:30	宿舎着(同窓会メンバー)	
	:		自由研修、日程打合セ	※地方日程は
		16:00	宿舎発	予定の東北地方
	~	16:30	クアラルンブール (スパン国際)空港着	ケランタン州コタバル
		17:40	クアラルンプール空港発「マレイシア航空 248便」	大洪水のため
		18:30	ペナン(バヤンレパス国際)空港着	西北地方の
		e.		ペナンに変更
	ペナン		民泊家庭プログラム	
				ペナン州
				各ホストファミリー
4				ホストファミリーは
	25日(金曜)			過年度参加者で
		•		PAMAJA (同窓会)
		-	終日	のメンバー
			民泊家庭	
	ペナン		プログラム	
				ベナン州
				各ホストファミリー
5				
	26日(土曜)		民泊家庭プログラム	
		10:00	ビーチサイドホテル集合	
	ペナン	12:30	同窓会(PAMAJA) ペナン州メンバーと交	
			流会	
:		14:30	民泊家庭プログラム	
	~	18:00	ペナン(バヤンレパス国際)空港集合	
		19:40	ペナン発「マレイシア航空 251 便」	
	クアラ	20:30	クアラルンプール空港着	
	ルンブール	21:00	夕 食	
			団打合せ	ホテルホリディーイン

^{*}時刻は現地時間

	· ·			
	月日 滞在地	時 刻	プログラム	主要面談者(宿舎等)
6	27日(日曜)	8:00	朝 食	
		9:00	クアラルンプール郊外見学	
			ゴムの木、セランゴール・ピューター(錫) 工場	
			バティック(染)工場、バツウケーブ(ヒンズー教)	
	:	12:30	昼 食	
		13:30	宿舎着	
			自由研修	
	クアラ	17:30	シティ女史宅(人事院東方政策課職員)訪問	
	ルンプール		同窓会(PAMAJA) とのセミナー打合せ	
		21:30	宿舎着	
		22:30	団セミナー打合せ	
				ホテルホリディーイン
7	28日(月曜)	8:00	朝 食	
	. •	9:00	同窓会(PAMAJA) とのセミナー	大使館伊藤書記官
		12:30	昼 食	
		13:30	同窓会(PAMAJA)との懇談	
		·	自由研修	
	クアラ			PSD:ワハブ氏
	ルンプール	20:00	レセプション	JICA:酒井氏
			同窓会(PAMAJA)との交流会・民族舞踊	大使館:伊藤書記官
		22:00	同窓会 (PAMAJ A)との日程打合せ	
		23:30	団打合せ	ホテルホリディーイン
8	29日(火曜)	8:00	朝 食	
		9:00	クアラルンブール発	
			カマンミニマレイシア	
		-	各州の代表的民家の展示村	
	クアラ		動物園 (Zoo Malaysia)	1
	ルンプール	14:20	昼 食	
	·.	15:00	マラッカ市内見学	
	~	17:00	マラッカ発	
ļ		18:30	ポートディクソン(マラッカ州ゲストハウス)着	,
		19:00	- 同窓会(PAMAJA)とのバーベキューバーティー	同窓会長ジャミール氏
	マラッカ		懇親会	
		23:30	団打合せ	ペナン州ゲストハウス

	月日 滞在地	時 刻	プログラム	主要面談者(宿舎等)
9	11月 30日(水曜)		朝食	
		10:00	ポートディクソン発	
	マラッカ	12:30	人事院 (PSD) と同窓会 (PAMAJA) に感謝	PSD ワハブ氏
			昼食会	同窓会長ジャミール氏
			同窓会(PAMAJA) との懇談	
	~	16:00	JICAにて 滞在日程報告会	JICA 酒井氏
	·	19:00	同窓会(PAMAJA) メンバーと夕食会	
-	クアラ	22:30	日程評価会	
	ルンプール		報告書打合也	ホテルホリディーイン
10	12月			
	1日(木曜)	7:00	朝 食	
		7:30	宿舎発	
		8:00	クアラルンプール (スバン国際)空港着	PSD 職員・PAMAJA
		9:30	クアラルンプール空港発「マレイシア航空	メンバー多数見送り
			M H 9 2 便]	
	クアラ			
	ルンプール	16:30	成田空港着	
	~		解散	
:	成田空港	-		i de la companya de l

^{*}時刻は現地時間

2. 調査の要約

国際協力事業団マレイシア・クアラルンプール事務所では人事院と同窓会組織について、日本大使館では国情について、又、人事院ではこの事業に関する同院のかかわりについてブリーフィング。同窓会からは帰国後の同会の活動状況、これからの展望について伺った。帰国青年とのセミナーでは同窓会の役割や同窓会がこれからのとのように関わっていくか特に再交流の具体的方法について討論会を持った。上記の機関、組織にかかわらず滞在地で接触した方々から全体的に社会情勢、政策、民族、宗教、気候、文化、食生活、産業の状況、経済事情等を見て、聞いて、理解につとめた。マレイシアを垣間見ることに過ぎないかもしれないが、特に、同窓会メンバーでもあるホストファミリーからは日本滞在中のプログラムについてのコメントを拝聴し、2泊3日と短い期間ではあったが家庭生活を通して実際に市場、ショッピング、鉄道駅、家族の親類・友人等を通じて紹介いただき、あらゆる角度、視点から異文化を吸収し次年度からのプログラムに反映すべくつとめた。(ただ一点残念でならないのは東海岸一帯の大

洪水のため当初予定のマレイシアの古都であるコタバルで伝統的な文化や青年団体との接触が 持てなかったことである。)

3. 現地活動報告

- 3-1 表敬、訪問先における意見交換内容
- JIOA マレイシア・クアラルンプール事務所

岡部和夫所長

21世紀のための友情計画を成功させるためには、5年間を経過した段階で受け入れる 国から受けられる側の立場からマレイシアという国を実際の目でよく見てホームスティな どの体験により今までの知識の誤解を認識することが大切である。こんどはもっとPAMA JA(同窓会組織)という幹をどんどん太くして、同窓会を通じて意見交換しこれからの要 請を具体的に聞くことが重要である。

在マレイシア日本大使館

小池寬治公使、伊藤光子二等書記官

今回が最初のマレイシア調査団であるのでまずはマレイシアという国について見極めて 見識を広めることが肝要である。大使館側としてもセミナーに参加するなど積極的に支援 するなど友好的であった。その後、一般に開放されている日本に関する図書閲覧室を見学 人事院(Public Services Department)

Mr. AZIZAN AYOB

人事院(略称 P. S. D.)は 2 1 世紀のための友情計画のマレイシア政府としての窓口であり東方政策課(Look East Policy Unit)が担当しているマレイシア側から一方的に日本を訪問するだけでなく、マレイシア側として受け入れるような交流を推進していきたい。政府間レベルばかりでなく、民間レベルの人と人との交流を深めていくことが非常に重要である。その後、担当課内見学および職員と歓談。

3-2 帰国青年同窓会等の活動状況

同窓会名 PAMAJA (バマジャ) 1986 年設立 -

PERSATUAN ALUMNI MALAYSIA JAPAN

マレイシアでは21世紀のための友情計画の参加者の同窓会組職として"PAMAJA(パマジャ)"という組織ができている。そしてその組織は、人事院とJICAマレイシア・クアラルンプール事務所と連絡をとりあい、連携を保ちつつ活動をしている。

機関紙の発行、日本語の学習、独自の活動等、実際の会員として来日青年の約半数近く

[※] ケランタン州コタバルで予定の州知事表敬訪問、青年局長表敬訪問、ケランタン州王家迎賓館においての青年組 織との懇談会はマレイシア東海岸全域大洪水のため中止となった。

(380名)が加入している。

会費は1年にマレイシアドルで10ドル(=リンギット)である。日本円では約470円 (1988年12月現在)。

活動の中心はクアラルンプールに在り、現在、同窓会の希望としては独自の事務所を持つ べく各方面に協力を働きかけている。

同窓会の構成としては、会長1名、副会長1名、事務局長1名、会計1名、書記1名、他 に幹部会メンバーとして8名の合計13名が中心役員で全員もちろんボランティアである。

機関紙は年4回季刊号で発行していて同窓会に加入している会員に郵送している。

定例会は、クアラルンプールを中心に近郊の会員を含めて、数か月毎に開催している。

今後の活動としては、資金的に不足している現況をなんとか打開すべく、独自の事業を行って、それを活動資金にあてたいとして、旅行取扱免許を申請中であるということ、又、相互交流のマレイシア側の受け入れ窓口として位置したいということ、それから、日本人側との一般交流として、双方の機関紙の交換や日本のマレイシアでのイベントの広報窓口としてもこの同窓会組織"PAMAJA(パマジャ)"を活用してほしいなど活発な意見が多く聞かれた。

結成後、数年しか経ていない同窓会組織としてはかなり活発に機能していると思える。そして、これからもこの組織が順調に発展し育っていけば青年のクアラルンプールでの事前研修などや同窓会組織の中からリーダーとして再来日の可能性を示せる方向に持っていくことにより、より一層の会員の励みとなり、中身の充実をはかれるのではないかと考えられる。ただ今回の訪問日程ではサバ・サラワクの両州での同窓会活動の状況をつかめ得ぬままとなってしまったがクアラルンプールやその近郊での会員ばかりではなくサバ・サラワクの両州をはじめ全国に散らばっている同窓会員をどのように巻き込んで活動して行くかが今後の課題となってこよう。

3-3 セミナー・交流会実施状況

◎帰国青年とのセミナーに関しての報告

マレイシア側セミナー参加者

Mr. Abudul Rahim bin Hussain 1984 アセアン混成

Mr. M Jayakumar 1986 公務員

Mr. Shariman bin Hamdan 1986 青年指導者

Miss Zuraida Amiruddin 1986 アセアン混成 公務員

Mrs. Kalsom bte. Wahad 1987 青年指導者

Mr. Abdul Hakim Ashari Saprawan 1986 勤労青年

Mr. Che Mohd Hashim 1986 公務員

Mr. Tarmizi bin Ahmadon 1985 アセアン混成 公務員

Mr. Chin Weng Peng 1985 公務員

Mr. Norzain bin Abdul Wahab

1986 学生

オブザーバー(同窓会: PAMAJA)

Mr. Zakariah bin Md. Sam

1984 学生

Mr. Ibrahim bin Mat Din

1986 勤労青年

他に人事院・日本大使館より各1名

セミナーのテーマ

- ① マレイシアと日本の両国背年の友情交流を発展させるための PAMAJA(同窓会組織) とWYVEA (世界背少年交流協会)の役割について
- ② 第2次"21世紀のための友情計画"(1989~1993)の成功のためのPAMAJA (同窓会組織)とWYVEA (世界青少年交流協会)の関わりについて

実施方法

1-1月28日(月)9:00~12:00

当初の予定では、2つのグループに分かれてテーマをひとつずつ話し合うことになっていたが、日本側が5名で共通・合宿・地方・ホームスティ等の各分野別プログラムの担当者であるため一つのグループで一応テーマを基本としながら自由にお互いの意見を出し合うフリーディスカション方式が取られることになりマレイシア語と日本語の通訳を介して進められた。

セミナーの内容

・21世紀のための友情計画がどのように運営されているかについてJICA(国際協力事業団)・WYVEA(世界青少年交流協会)FOWY(世界青年友の会)の関連について質問を受けた。

この事業がどのようになされているかについて帰国青年は理解していなかったか忘れてしまっているようであった。事前の準備不足か?

・ PAMAJA の現在の活動状況

資金面では政府から補助を受けている。

3ヵ月に一度、機関紙を発行、配布

これからは、一般の受け入れを企画、推進していきたい

PAMAJA 側からの質問

- ・日本人へのマレイシアのレクチャーは誰がしているのか?。
- ・帰国後、4割ほどが交流を続けているのだが今後、もっと交流を深めて行くにはどう したら良いか?
- ・ホストファミリーと連絡をとるには、どうしたら良いか?
- ・実施協力団体に、活動調査団は派遣するとしたら何をやってもらえるか?
- ・今回のホームスティの感想は?

- ・日本での回教徒宅へのホームスティは、可能か?
 - ・21世紀のための友情計画にかかった資金は、総額でどのくらいか?

PAMAJA 側からの提案

- ・日本と同窓会の間で情報交換誌を作りたいが、日本側の窓口は?
- ・日本というものをアピールする催しを積極的に行ってほしい

PAMAJA 側からの不満点(日本でのプログラムに関して)

- ・ホームスティの回数をもっと増やしてほしい。
- ・ホームスティ先でお客さん扱いをしてほしくない
- ・通訳の質が、あまりよくなかった

日本側調査団よりマレイシア側

- ・日本についての基本的な知識を身に付けるための事前研修をきちんと行ってほしい。 必要ならば関連資料を送る。
- ・日本側にも連絡を取り合える窓口を作り、自由に、お互いの連絡を取り合えるように したい
- ・できるところから、少しずつ交流を広げていくように努力する。
- ・要望として、参加者の4割は、女性になるように参加者選考を行ってほしい

PAMAJAから人事院への報告および要望

- ・同窓会の名簿を作る
- ・同窓会事務所を設置
- ・日本からの青年を受け入れたい
- ・受け入れ体制の強化のため、実施協力団体へ活動視察団を派遣したい
- ・ホームスティに関して

都会と田舎の2カ所で

ホストファミリーの活動に参加したい

日本の回教徒宅に滞在したい

・日本とマレイシアは、互いの活動を大使館を通じて一般に公開してほしい

◎交流会についての報告

○日本側主催の交流会

11月28日(月)20:00~22:00

於:ホテルホリデイイン。

[※] こうした質問や提案について、我々の立場から答えられる範囲のものには、丁寧に答え、それ以外のものについては、日本で国際協力事業団に報告し検討するとの回答を示した。

[※] 全体的にみて、PAMAJA の組織としての働きはまだしっかりとは、確立しておらず、これからの活動運営について模索中の段階といえるであろう。

参加者:同窓会 PAMAJ Aメンバー、人事院、日本大使館 国際協力事業団マレイシア・クアラルンプール事務所

食卓を囲んで着席で食事をしながら歓談、マレイシア側から民族舞踊や歌などの披露、 歌の交換

○マレイシア伽主催の交流会

11月26日(土)12:30~14:30

於:ペナンビーチサイドホテル

参加者: 同窓会 PAMAJA ペナン支部のメンバー、ホストファミリー

同窓会 PAMAJA ペナン支部のメンバーの手作りの料理でバイキングスタイルパーテ

ィーおよびフリートーク、歌の交換

11月29日(火)19:00~21:00

於:マラッカ州ゲストハウス(ポートディクソン)

参加者:同窓会 PAMAJA メンバー、人事院、日本大使館

バイキングスタイルパーティーおよびフリートーク

同窓会連絡先及び役員名簿

No. 25, SS15/2B,

Subang Jaya, Malaysib

会 長: Mr. Jamil Mohd Noor

副 会 長: Dr. Naser Azuddin

事務局長:Mr. Zakariah Mohd. Sam

事務局: Mr. Mohd, Solehan Omar

Mr. Chik Omar Chik Lim

Mr. Ibrahim Hj. Hd. Din

Dr. Hohd Chazie Ismail

Mr. Menet Saad

Mr. Kamaludin Mat Lela

Mr. Hohd. Zubir Ali

Mr. Norijan Ahmad

Mr. Mohd. Rozi Mokhtar

Mr. Tuan Hj. Zainal Buang

[※] これからの交流会を通して、多くの帰国青年達に会い、会話を交わすことができ、この事業に関して、日本に関して、滞在プログラムに関して等々様々な青年といろいろな角度から意見を拝聴でき有意義なものであった。同時に、帰国青年同志の旧交を温めありことに有効的であった。我々同様に、大使館、国際協力事業団マレイシアクアラルンプール事務所の職員の方々の現地の人達との直接の交流の場ともなり、この事業について直接耳にすることができ非常に価値のある場であった。

Mr. Tuan Hj. Zainal Buang

3-4 ホームスティ実施状況

西マレイシア西北部ペナン州 11月24日(木)~26日(土)

<ホームスティについての感想>

駒井真弓

ホスト Miss Zaliha Yahya (ザリハさん) 3 2歳

1985年に学生グループで来日

現在、ペナン土地開発公社に勤務、フリーアルバイターの弟と2DKで二人暮らし、 実家はケダ州。

滞在中の日程

11月24日(木)

バヤンレパス国際空港出迎え

夕食は妹ソフィアさん(21世紀のための友情計画で来日)と彼女の 同僚の方々と共に

11月25日(金)

ペナン土地開発公社訪問 スネイク・テンプル コムタビル

植物園

ペナンブリッヂ

ペナン島内ドライブ

11月26日(土)

各ホストファミリーと共にペナンビーチサイドホテル集合 バタフライガーデン

同窓会ペナンのメンバーや各ホストファミリーと共に交流会 梅辺で自由行動

ホームスティは、当初の予定では、クランタン州のコタバルで行われる予定であったが、当地が洪水の被害を受けたため急遽ペナンに変更された。その為、私のホストのザリハさんは、同窓会より前日になって急にホストを頼まれたようだが快く私を出迎えてくださった。私は子供のいる一般的な家庭を予想していて、この若いホストと弟のふたり暮らしのところへ行って、どうなるのだろうかと不安であったのだが、ケダ州に住む妹のソフィアさんと彼女の友人達などの暖かい歓迎を受け、すぐに打ち解けることができた。

日本での思い出話をアルバムを見ながらしていると、あっという間に時が過ぎていっ

た。彼女は私のことを全く"お客さん"扱いせずに、遠くから友人が訪ねてきたかのように接してくれた。彼女が日本でお世話になったホストファミリーが、とても素晴らしい家庭であったらしく、自分もペナンへやってくる日本人をどんどん受け入れて、自分と同様に良い思い出を作るお手伝いをやっていきたいと言っていました。これを聞いて私は、この"21世紀のための友情計画"の蒔いた種が、脈々と生きづいていると感じました。

初めてのホームスティ体験であったが、やはりその国を知るには、これが一番の経験であると実感しました。ホテルに泊まって、名所を見学しているだけでは得られない、本当の現地の人々の生活や人柄などと云ったものを知ることができると思います。私はまずトイレ作法の違いに戸惑い、食事も初めて、右手だけを使い素手で食べました。私のホストファミリーは、本当にごく普通の家であったので、食事も床に布をひいてそこにたべものを並べて食べましたし、寝床も、床に大きなシーツを一枚引いただけの上でホストと共に眠りました。日常のちょっとしたことの違いに、私は驚きながらも新鮮な感動を覚えた3日間でありました。3日間寝食を共にするだけで、これほど深い心の繋がりができるとは、全く夢にも思っておらず、非常に素晴らしい体験でありました。こうした小さな心の繋がりをどんどん広めて行くことが、真の交流であり、一番大切なものではないかと感じさせられました。

松井真智子

ホスト Mr. Yusof Hj. Abdul

1987年に青年指導者グループで来日

現在、地区の村長で家族は奥さんと子供は男の子ばかり4人(9歳、8歳、7歳、1 歳半)

滞在中の日程

11月24日(木)

18:30 バヤンレパス国際空港出迎え

ペナン州のシンボルであるペナンブリッチを渡り陸地側30キロの処が ホストファミリーの村長さん宅兼村役場である。途中、タイ料理レスト ランで夕食

22:00 ユソフさんの家に到着、外では村役場付属の照明設備付の屋外バトミントン場で村の青年がプレイを楽しんでいる。

家に入り、自己紹介をした後、家族の名前を教えてもらう。ユソフさんが日本に滞在したときのアルバムを見たりして、時間を忘れるくらい話し込んでしまった日本からの記念品を渡し、子供たち相手に折り紙やおはじきに興する。奥さんのおすすめで民族衣裳のカイン(マレイシアで

は男女とも着用している腰巻風の普段着)を試着。

24:30 また、背年たちがバドミントンに興じる声が響く中を就寝

11月25日(金)

- 7:00 朝、鳥の鳴き声で目が覚める。軽く、朝食をとり付近を散歩、澄みきった青空や珍しい木や花に感動を覚える。
- 8:30 ユソフ家を出発。パーム椰子、ゴムの木、ココナッツ、椰子、ランブータン等の木々が繁る道を車は走って行く。女性市議会議員宅にて中国からマレイシアを訪問中のミニスターの歓迎行事に参加。次に、農業協同組合へ行き、ここに勤務するユソフさんと一緒に日本に来たメンバーの紹介を受け、午後、彼の家を訪問することを約束して別れる。その後、郡役場を見学し郡長さんと懇談。
- 12:30 いったん家に戻り奥さんと子供を乗せ奥さんの実家を訪問、ユソフさんの配慮で途中、鉄道駅を見学、運良く国際列車を見る機会を得た。

この家の家族構成は、両親と妹夫婦一家。皆さん心からの歓迎して下 さり昼食を御馳走になったり、この"21世のための友情計画"で訪日 したメンバーにお会いするなどして歓談しくつろいた時間を過ごす。

- 15:00 約束していた農協勤務の友人宅へ。新興住宅地で奥さんと1歳半の女の子とで住んでいる。ここでも御馳走になり、初めで有名なドリアン(果物)を試食。鼻をつく臭いの割には甘いクリームのよう味である。
- 16:00 晴天の青々とした水田地帯を通り家への途中の川に到着する。川を境に向う側はあたり一面濁水、洪水現場を目のあたりにして呆然と立ちつくし言葉を失う。

引き返して、西海岸の方へ海辺では、子供は凧あげ、ショギングして いる人など、様々に楽しんでいる。快い風が頬をなでる。素晴らしい夕 日に感動する。

- 18:00 オープンマーケットを見学。ここで、生活必需品がすべて揃う。とくに、 食べ物の店が多く、活気に溢れ庶民の生活を伺える。
- 19:00 再び、奥さんの実家に戻り家族一緒に1985年度来日のメンバー宅を 訪問。訪日したときのアルバムを見せていただき、当時の話などしてい るうちに夜も更け、夕食を御馳走になり、快い歓迎を受け感激し帰路に つく。
- 22:00 ユソフ家に帰着。前の晩と同様、青年たちがバドミントンを興じている。 マレイシア式のお風呂も最初の抵抗も次第に薄れ、慣れればそれなりに 快適である。

24:00 そとの背年たちの楽しむ声を子守歌に今晩も就寝。

11月26日(土)

7:00 起床、荷物整理。子供たちは疲れたのかまだ寝ている。

9:30 フェリーでベナン島に渡る。左手にベナン橋が見える。海から見るジョージタウンはまた格別。

10:00 ジョージタウンの町をドライブしながらペナンビーチサイドホテルのロ ビーに集合。各ホストファミリーごとに行動。私はホストとバタフライ ガーデンや博物館等を見学。

12:30 ペナンの同窓会メンバーおよびホストファミリーと交流会。マレイシア 料理を満喫し、歌の交換など終始楽しい和やかな雰囲気で過ごす。

15:00 ホストファミリーとペナンで一番高いコムタビルからペナン島を一望する。やっと懐いてくれた子供も別れの時刻が近づくにことを感じ残念そ うである。

18:00 空港ロビーに全ホストファミリー、ペナンの同窓会メンバーなど関係者の見送りを受ける。ペナンに来てからたくさんの人々と出会い収穫の多いホームスティでした。お世話になったユソフ家の皆さんを心より感謝したい気持でいっぱいです。結局「テリマカシ、ジュンパラギ」(ありがとう、また会いましょう)と繰り返すばかりで言葉は見つからず、いつまでも手を振るだけでした。

安田忠正。

ペナン空港の到着ロビーへ出るとホームスティの家族が集まっている様子が目に入った。

私たち5名を彼らも探している様子だった。5歳位の娘さんと手をとりながら待っていた人が私のホームスティ先のアーマド・アムリさんと娘さんだった。人なつっこいラムリさんはすぐに車置場へと私を案内し、彼の家へと向いました。彼もつい2週間前に研修員として一ケ月日本に滞在して帰ってきた処だそうだった。日本での話で家に着くまで持ちきりだった。親子4人とメイド一人、このメイドさんにどう対処すればよいのか大いに悩んだ。彼らは空気のように扱い、彼女も自分の本分を良くわきまえていて、しゃしゃりでないし、やることは実にテキバキと行動していた。そして時おり、興味深そうに私を見ていた。

何度か受け入れ家庭としてホームスティを体験してきたが、自分が受け入れられる となると、逆に彼らがいかに私という一人の日本人に対し、気を遣ってくれているの が良く見える。

少々我がままを云いわしてもらったが、親切に答えてくれ、彼らの職場へも行き歓

迎を受けた。

さりげなく客としての扱いを受けつつホームスティを大げさに考えなく、実にスマートだったのには感心した。日本でホームステイバンクを主催している自分たちも、ホームスティはこうでなくてはという見本を見せてもらったようなものである。 何度も"昂"や"ブランデーグラス"をお互いに口ずさみながら、二人の子供たちや少し控えめな奥さんに見守られながら楽しいホームスティの3日間であった。

ホストファミリーリスト

(団員名)

職業・勤務先・住所・電話番号

Mr. Ahmad Ramli

安田忠正

Assistant Director

Penang Education Department

■ 04-625448 (Office)

8 4 4 2 5 2 (House)

Mr. Mohamad Zam Zam Ismail

佐藤恒雄

Instructor

Civil Aviation College

Penang Branch Penang

International Airport

11900 Bayan Lepas, Penang

8 04-834411-168

8 8 0 2 2 7

Miss Zaliha Yahya

駒井真弓

Town Planner

Penang Development Cooperation

No. 1, Jalan Sungai Nibong,

Bandar Bayan Baru,

1 1 9 0 9 Bayan Lepas, Penang

8 04-832111-318

Mr. Yusof Hj. Abdul Rahman

Head of Village

Rumah Penghulu,

Jalan Tasek,

1 4 1 2 0 S. Perai

松井真智子

丸山良雄

Pulau Pinang

8 0 4 − 5 2 4 5 1 1 (Office) 5 2 6 5 4 6 (House)

4. 訪問国における青少年団体の活動状況

この項に関してはケランタン州コタバルにおいて調査予定であったが当地豪雨により大洪水で被害基大のため急遽ペナン州に変更のため調査できず。

5. 青年招へい事業に対する相手国の評価

関係機関

(1) 人事院 (Public Services Department) 面談者

> 人事院研修·能力開発局次長 Azizan Ayab 氏 同局 東方政策課長 Wahab Hd. Yasin 氏

本事業の主催者である国際協力事業団ならびに実施協力団体にたいして、日本国内でのプログラム運営および調整の労に感謝しているとのことであった。

過去5年続けられた本事業は、マレイシア・日本両国の交流に大いに貢献しており、さらに今後5か年継続されることが決まり、マレイシア・日本両国の交流をさらに深められると期待しているようである。

日本国内でのプログラムは、効果的且つ効率的に実施されており、参加青年は日本について見聞を広めると共に、知識を修得し情報を収集することが可能であるとし、満足しているようである。

参加青年は、日本滞在中に知りあった友人と帰国後も文通などにより日本との繋がりを保持しており、小さいながらも、着実に息の長い交流を継続しており本計画のひとつの効果であるとしている。

また、これまでマレイシア側より日本を訪問するのみであったが、今回の日本からの訪問団のように相互の交流は意義深いものとし、マレイシア側としても同窓会と協力し積極的に受け入れを行いたいとのことであった。さらに、政府間ベースの交流ばかりでなく、民間レベルでの交流を推し進めることが重要であるとの感想であった。

(2) 帰国青年同窓会(PAMAJA)

面談者

同窓会 会 長 Jamil Mohd, Noor氏

" 事務局長 Zakariah Mohd, Sam氏
他 同窓会役員

本事業の主催者である国際協力事業団はもとより、世界青少年交流協会をはじめとする 実施協力団体に対し、訪日する機会が得られたことと、日本滞在中のプログラムを通じて 貴重な経験をすることが出来たことについて、一様に感謝の意が表された。

日本国内で実施されたプログラムは、運営面・調整面において概ね評価を得たものの、 講義における通訳の問題や、ホストファミリーと参加青年との職業の合致などいくつかの 改善点も指摘された。しかし、全体として参加青年の日本滞在の印象はよい。帰国後も日 本についてもっと学ぼうと積極的であり、留学先を予定の欧米や豪州などから日本に変更 するものや、地域で在マレイシアの日本人と積極的に交流を試みる帰国青年もいるなど訪 日の影響は大きなものがあるとのことである。また、帰国青年の約4割が、現在もなおホ ストファミリーや合宿セミナー参加日本青年などと交通を続けており小さいながらも、交 流が続けられている。

このように、帰国後も日本人との接触を通じて、より一層日本についての理解を深めようとしているばかりでなく、自らの職場などの隣人に対して日本で得た経験や知識などを 積極的に伝達しょうと試みる者もおり、交流が有意義であることを改めて痛感していると のことである。

PAMAJA(同窓会)は、1988年10月に大阪市マレイシア訪問団を受け入れているが、マレイシアにおいて交流プログラムを企画・運営する機会を得たことは非常によい経験であった。今後、相互の交通を推進して行くためにも、日本からの同様の訪問団が増えることを期待し、また、同窓会はそれらを受け入れる用意がある。このように「21世紀のための友情計画」の参加者が実際に交流を手掛けて行くこと自体が、この事業の大きな成果であると認識しているようである。

6. 調査チーム参加者の感想

マレイシア訪問

佐藤恒雄

闇の中を、飛行機は徐々に高度を下げている。ふっと明るい光の島が浮かび上がる。空港の誘導等であろうか。ほどなく飛行機は、鈍いタイヤのスリップ音とともに着陸した。午前3時半である。見慣れたヤシの葉影は、赤道に近い南国の故郷に帰ってきたという感慨に胸が熱くなる。3年ぶりに降り立ったクアラルンプール郊外のスパン空港は、深夜ということもありいつもの喧騒もなく、行き交う人もまばらだ。

わたし自身にとってはかつて、2年間青年海外協力隊の隊員として協力活動に従事してい た地である。

この度のマレイシア訪問は、アセアン青年招へい事業のアフター・ケア・プログラムの訪問団 5 名の一員としてであり、10日間の日程であった。

過去5年、東京でアセアン各国の青年を受け入れ(共通プログラムの実施)を担当しており、すでに何千人もの青年の顔を見てきた。この地でかつてマレイシアからの参加青年と再会することは、旧友との再会を思うように胸がときめくのである。

マレイシアでは、帰国青年が組織している同窓会(PAMAJA)が、今回の訪問団の受け入れを担当してくれた。彼らが準備していたプログラムは、日本国内で行っているプログラムのミニ版とでもいおうか、セミナーやホームスティなどが日程に組み込まれている。私も日本にやってきた青年の気分に心を移し変え、このプログラムに参加しょう。

ホームスティブログラムは当初、東海岸の古都コタ・バルで行われる予定であった。しか し、折しもマレイシア全土で猛威をふるった洪水のためコタ・バルもその被害少なからず、 急遽訪問を取り止めることにあいなった。そして、私たちはペナンに向かったのである。

ペナン空港ではホストファミリーのザムザム君(1988年度公務員グループ)と会う。 彼は、マレイシアを良く知る日本人が、つまり、私がゲストで良かったというが………。

若干の緊張とともにザムザム君の家に到着。

彼の家での2日間は、私にとってカルチャーショックでもある訳ではなく、ホストファミリーにとってはやや物足りなかったのではないか、食事も辛いといって食べられないわけではないし、水浴び場やトイレの使用方法にとまどう訳でもなく、言葉に不自由する訳でもないし。遠来のゲストとホストとの間で、文化や習慣の違いに端を発する小さな失敗や多少の戸惑いが、楽しい雰囲気を醸し出すであろうに……。とまれ、遠来の私に、一時の安らぎを与えてくれたザムザム君一家であった。

マレイシア滞在の10日間は、受け入れ担当の同窓会 PAMAJA の面々には当方にたいしては過分なお世話をいただいた。元来ひとなつこいマレイシアの人々ゆえ想像はしていたのだが、ここまで親身に対応してくれるとは。

今回の訪問で、様々な帰国青年に再会したが、みな一様に親日派である。彼らは、今もなお意欲的に日本について知識を深めたり、文化を理解しようとしている。帰国後、在マレイシアの日本人と積極的に交流を図っている青年、日本での体験を職場にフィードバックし役立てている青年、留学先を欧米から日本に変更した青年、日本との交流をさらに促進させるため同窓会で活躍している青年等々。

これらの青年たちは、小さな交流ではあるが、しかし、着実に文化交流の地補を固めている。この小さな交流が歳月を経て、やがて来る21世紀に、日本とマレイシア、そして日本とアセアン諸国との相互の理解と信頼という果実を結ぶことであろう。彼らの努力に敬服する。

今回のマレイシア訪問は、交流の重要性を再認識させてくれた「旅」であったのである。

私にとって今回のマレイシア訪問の話はうれしさより不安感が先に立ち、気持の整理のつかぬままに話が先行していきました。それには、主婦でありながら10日間も家を開けること、語学力の問題、さらには初めての海外訪問であることなどでした。しかし、2度とこのようなチャンスはないと家族に励まされ、主婦でもあり女性の立場からマレイシアという国を実際のこのめ出見てこようと決心しました。

私たち一行5名は、成田空港を出発し、無事クアラルンブール空港を到着。まず、最初の 印象は、緑が豊富な都市であること、道路を走る車の中に日本車の多いのに驚いたことでし た。

また、不思議なことに外国にいるという実感がありませんでした。初めて会う人々なのになんとなく懐かして気がして親しみを覚え、違和感が全くなかったのは私だけだったでしょうか。

今年の夏、マレイシアの学生グループのホームスティを引き受けたことにより、多少の予備知識は持っていたつもりでしたが、「百聞は一見にしかず」。想像の限りでは語りきれないものがたくさんありました。

まず、服装に関しては、考えていた以上に華やかでカラフルで、しかもバラエティーに富 んでいました。

マレー系の女性はスカーフのかぶり方はまちまちだが、一般的に民族衣裳を着用し、普段着として男女とも腰巻のような布(カイン)を着用していました。私も実際に纏ってみましたが、上は長袖のワンピースに、下は足首までの長さのスカートのようなものをはくのですが、実に楽で涼しくて思った以上に活動し易いのです。

しかし、中国系の人たちは日本人と全く変わりなく、インド系の人たちは民族衣裳である サリーを着用している人もいれば、普通の服を着用している人もいて、多種多様である。

私が興味深かったのは食生活に関しては、なんといっても果物が豊富であり、おいしくて 安価で手に入ることです。もちろんジュースは天然果汁100パーセントである。食事につ いては、少々辛い味付けの料理もあるが、野菜を十分に取り入れてあり、全般的には、何の 抵抗もなく受け入れることができました。

オープンマーケット(露天の市場)は、庶民の生活が伺える興味深いものでした。まず、 ここに来れば生活必需品がほとんど揃い、特に、食物を取り扱う店が多く活気に溢れていま した。

住居に関しては、私の見た範囲では、都市部ではかなり近代化しており、新興住宅が建ち並んでいるが、農村部に行くと、現在もなお、マレーの伝統的建築方法が至る所に見ることができる。